

平成 27 年度 文科省 総合的な教師力向上のための調査研究事業

実施テーマ 教育課題に対応するための教員養成カリキュラム開発

学校ボランティアの実践力評価 基準の効果に関する調査研究

報告書

福島大学人間発達文化学類

平成 28 年 3 月 30 日

はじめに

1. 課題認識

教員養成カリキュラムの要諦は、理論と実践を往還させることであり、教員としての即戦的・実践的力量を形成することにある。大学で学ぶ専門的知識は実践の場で生かされて初めて生きた知識になるだけでなく、経験の中で身につける実践的知識が大学の学びを確かなものにする。教員養成カリキュラムには、教育実習という義務化された制度があるが、その多くは、授業実習であり、教壇に立つ実践力養成としては不十分である。学級担任は、授業づくりを中心としつつも、生徒指導を含む学級経営や学校に関わる特別活動等、多様な教育活動を行っている。それゆえ教育実習を超えて、実践力を身につける機会が必要である。学校ボランティアは、その一つとなる。学校ボランティアを継続的に取り組むことによって、教育活動の総体に慣れることが可能となるからである。

しかし、学校ボランティアは、学校のお手伝いをして終わりとなりかねない。そこでの課題は、学校ボランティアを通して学生にどのような実践力が身についたのかを明らかにすることである。

2. 現状の取組

本学類では、平成 24 年度より学校ボランティア支援室（現場退職者教師による非常勤）を設置し、継続的に学校ボランティアを実施している。アンケートによれば、本学類の七割の学生がこの活動に興味を持っているが、実際に参加できる学生は少数である。その点をカバーするために工夫している点として、ボランティアの掲示板の設置、ボランティアのようすを紹介するパネル展や学内展示、支援員による定期的な学校訪問、支援員による 1 時間を超す丁寧な相談活動等がある。この活動から明らかになったのは、ボランティア活動の目標が、参観から参加、そして参画へと変化しているだけでなく、学年段階で見ると、2 年生の学校理解の段階、3 年生の自己課題を焦点化する探究の段階、4 年生・院生の実践力を高める段階になっていることである。と同時にこれまでの学校の要請に応えるボランティアから、学生と学校のニーズをすりあわせながら、ともに役に立つボランティアへと変化させてきている。平成 25 年度のボランティア登録人数は、16 名で、継続的に学校ボランティアを行った学生は少数だった。しかし改善を図った平成 26 年度には、42 名が実施し、そのうち 29 名が定期的に 4 ヶ月以上継続した（平成 27 年 1 月）。

平成 25 年度アンケートによると、学生側、学校側双方から効果があったとの高い評価を受けた。

平成 26 年度は、以上の評価を実践力として客観的に測る「福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準（案）」（以下、「実践力評価基準」）を検討し、3

月に試案を作成した。平成 27 年度より、学校ボランティアを単位化した「学校支援実習」を学年進行で 2 年次生から開始した。

3. 調査研究の目的

本学類は、福島市、郡山市、伊達市、国見町の 4 つの教育委員会と学校ボランティア派遣等の連携・協働の協定を結んでいる（平成 27 年度末には、新たに大玉村教育委員会、棚倉町教育委員会と協定を結ぶこととなっている）。

各市町教育委員会には、毎年 5 月に学類で開催する学校ボランティア説明会への参加をお願いしている。学校ボランティア派遣校には、学校ボランティア支援員が定期的に足を運び、学校ボランティア状況や学生の様子を意見交換している。

26 年度に作成された「実践力評価基準」（試案）に基づき、教師としての基礎的実践力が学生に育っているのかを支援員等が評価し、学校ボランティアの効果について検証するだけでなく、連携機関へのインタビュー調査による「実践力評価基準」の見直しを図る。それをもとに学生が学校現場で学ぶべきボランティア内容の再編成について検討するだけでなく、第 3 期中期目標・中期計画における実践型カリキュラムについても検討を開始する。

4. 調査研究の具体的な内容・取組方法

①26 年度作成予定の「実践力評価基準」（試案）をもとに、学生数十名と学校ボランティア支援員それぞれが実際に評価し、学生の自己評価と支援員の客観的評価を比較して、その相違をもとにカンファレンスを行う。

②カンファレンスをもとに、「実践力評価基準」の適切性について評価、再検討し、関係各教育委員会及び学校に対して、インタビューによる意見聴取をし、見直しを行う（なお、今年度は、関係各教育委員会へのインタビューは実施できなかった。今後の課題である）。

③修正「実践力評価基準」に基づいて、学生の自己評価と支援員の客観的評価を再度行い、「実践力評価基準」を確定する。

④学生が学校現場で学ぶべきボランティア内容の再編成について検討する。

⑤第 3 期中期目標・中期計画における実践型カリキュラムの検討を開始する。

学校ボランティアの「実践力評価基準」の効果と 教室のルーティンにつなぐ課題

福島大学研究員 齋藤 幸男

本稿では、大学での教員養成に何が求められているのか、何ができるかを、学校ボランティア活動をとおして明らかにしようとした。大学で養成する教師力を「福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準（試案）」（以下「実践力評価基準」）として作成し、学生の「学び」を「実践力評価基準」をもとに評価し検討した。また、学校ボランティアを体験し今年度教員となったURを、月1回訪問、調査観察し、「実践力評価基準」をもとに整理し検討した。そこから、学生から教員へとつながる大学の教員養成カリキュラムを検討したものである。

1 学校ボランティアの経過と学校教育支援実習の単位化

現在学校は様々な課題をかかえていて人手が足りなく、新任教員にも即戦力が求められている。そこで、福島大学人間発達文化学類（以下 本学類）では、人手の足りない学校を支援しながら学生の実践的指導力を高める活動として、平成17年度に福島市と、現在は郡山市、伊達市、国見町とも学校ボランティア協定を結び、平成24年度には学校ボランティア支援室を設置し推進している（資料1）。

活動までの手順は、各教育委員会が所管する各学校の活動内容を集約し本学類に伝え、本学類は説明会を開き学生に周知を図り、学生が活動校を決め申し込みをして活動に入る。

活動する学生が平成24年度13人、25年度23人、26年度45人、27年度49人と増加しており、活動内容も学修の効果が認められ、本学類は今年度から学校教育実践支援実習として平成26年度入学生から単位認定し奨励している（資料2）。

学生は、教職登録をした2年生から活動ができる。各自の興味関心によって学年に応じた計画で活動でき、自主的・自律的で実践的な学びが体験できる。

2年生は学類の授業が多く活動の時間が制限されるが、その中でも時間をみつけて2名の学生がそれぞれ1単位2単位を取得した。3年生は、教育実習後の活動が多く、もっと子どもを知りたい、本当に先生になれるのだろうかと問いながら活動している。4年生は、教員採用試験後の後期から、自信をもって教壇に立ちたいと願い定期的に継続して活動する学生が多い。

2 「実践力評価基準」の作成

学校現場では初任者にも実践的指導力や即戦力が求められているが、実践的指導力の内容は明確ではない。由布は、その内容について『現場の多様な課題に対応できる力』というぐらいの内容でしかない。『実践的指導力』という用語でイメージされているのは、何事にも対処できる指導力のあるベテラン教師が持つ知識や技能を指していると思われる¹と指摘する。時田は、文科省、教委、小中学校教員、学部学生、大学教員の「実践的指導力」の捉え方を調査し、「文科省は『使命感、人間の成長、発達の理解、教育的愛情、専門

的知識、教養』と羅列的に捉え、教委は主に『授業力』、小中学校教員は主に『授業力、人間力』、学部学生は主に『授業力』と捉えている」と述べ、大学教員の捉え方は多様であるとする²。

本学類は、平成 19 年度に福島県教育委員会とともに教員として共通に必要なとされる専門性を「福島の教員スタンダード」にまとめ、学生は「学類の教員スタンダード」をもとに自らの教職力を自己診断しながら学修している。それは「教員の自立と使命感」、「授業づくりと学びの創造」、「幼児児童生徒の理解と指導」、「教職員の協働と学校づくり」の 4 領域と 13 項目からなっている。どれも大切な項目だが、実践的指導力を評価するうえから整理検討をすることにした。

今「教える」授業から「学び」の授業への転換が言われるとき、「観」の転換が求められている。私たちは、平成 26 年度に、実践的指導力をより学校現場に近い観点から「子ども理解」、「授業づくり」、「学級づくり」、「学校・地域づくり」の 4 項目に整理し、「実践力評価基準」を作成した。

そこでは、「できる・できない」子ども観から「子どもは多様である・どの子ども有能である」という子ども観へ、「教える専門家」から「子どもの学びに応える専門家」という教師観へ、「知識獲得再生する」学力観から「問いをもち、追究・創造する」学力観へ、「閉ざされた」学校から「保護者地域と協働し、子どもたちが地域創造に参画する」学校観への転換を根本とした。

「子ども理解」とは、子どもと向き合う力をいう。学校では、子どもを「できる、できない」という 1 つの物差しで見がちである。できないこと、分からないことが悪いことのように受けとめられがちだが、どの子ども、これからの社会を創るかけがいのない大切な人である。障がいがあってもなくても、できてもできなくても、子ども一人ひとりとしっかりと向き合い認めるところが教育の出発点となる。そこでは、人権意識に基づいた共感的理解力、寄り添う力、応答力が求められる。

「授業づくり」とは、1 つは子どもの学びを保障する授業構想力をいう。どの子どもわかりたい、できたいと願っている。やってみたい、おもしろそうという好奇心を起こさせたい。こうしてみようと探究が持続する、デザイン力、転化力、応答力、臨機応変力、整理力が求められる。2 つが、子どもの学びをとらえる力をいう。一人ひとりの学びは理解の仕方も速度も異なる。一人ひとりの子どもに対応した価値付けや意欲、興味関心、態度の評価力と省察力が求められる。

「学級づくり」とは、子どもの多様性を共有し、協働する力をいう。一人ひとり異なる個性が学級という社会を形成している。発達段階に応じて、どの子ども一人の人として認め、自由で平等で民主的な学級の形成者として育てていくことが求められる。そこでは、説明力、発信力、交渉力、協調する力、統率力、巻きこみ力が求められる。

「学校・地域づくり」とは、子どもの学びを生かし、創造する力をいう。学校と地域とのつながりは、保護者や学校評議員等の一部の人たちとの交流に限られている。それも、地域から学校への協力という一方向で、学校・地域双方向の関係はあまりなかったとっていい。まして学校が地域に貢献するという事はなかった。しかし、東日本大震災・原発事故後、子どもたちの力を地域創生に生かす動きが大きく取り上げられるようになって

てきた。子どもたちの学びを単に子ども一人の学びに閉じ込めるのではなく、学びを生かして地域づくりに貢献することが期待されているといえよう。そのために、発見力、関連づける力、統合力、俯瞰力が求められる。

「子ども理解」をすべての項目の基盤とした「授業づくり」「学級づくり」「学校・地域づくり」の4項目と「発見・省察・創造」の3観点をクロスし、縦軸に学年段階による4項目の深まりを、横軸に3観点の「学び」の広がりを表にして「実践力評価基準」のモデル例とした（資料3）

教育活動の根幹となる教育観にあたる「教員の自立と使命感」は、4項目を実践・検討する中から自ずと生成されるだろうと考えた。

3 「実践力評価基準」の有効性と妥当性

平成26年度末に、学生に学校ボランティア活動報告（1200字程度のレポート）の提出を求めたところ、15人から提出があった。その報告書を学校ボランティア支援室スタッフ3人が「実践力評価基準」をもとに評価した（別表1）。3人の構成は、研究者1人実務者（教員退職者）2人である。その中の3人を例にみてみよう（表1）。

（表1）学校ボランティア活動報告書の評価例

学生学年氏名		4年UR	3年SK	3年MR
活動校		F三小	S小	H小
活動日数		20日	15日	29日
カンファレンス回数		4回	10回	10回
評価項目	子ども理解	3、4、3	3、3、4	3、3、3
	授業づくり	4、3、2	○、3、2	3、4、3
	学級づくり	○、3、3	○、3、3	○、2、4
	学校・地域づくり	○、2、3	○、2、2	○、2、○
資料（レポート）		資料4		

※ 評価項目の表記：3は3年達成を示す、○は空欄で評価をしていない。

※ 全員の評価表は、別表1にある。

学生3人は1年間ほぼ定期的に1週間に1日同じ学級で活動しており、活動をレポートにまとめたものである。

「子ども理解」については評価者3人とも同様の評価をしているが、「授業づくり」ではURの評価が（4、3、2）と分かれた。「学級づくり」、「学校・地域づくり」では、研究者は評価をしていない。これは、研究者はレポートから読み取ったことから評価していることも関係しているようだ。2人の実務者は、レポート以外にも活動現場に出かけて学生の活動の様子を観察したり、カンファレンスをとおして「学び」を聞き取ったりしている。

「学校・地域づくり」については、3人のレポートからはほとんど読み取れなかった。URは、3年生の社会科見学学習引率補助体験を記述しているが、社会科学習と地域との

関連に気付いても、学校と地域との結びつきに気付いているかは明確ではない（資料4）。しかし、レポートの記述やカンファレンスをとおして地域と教材と結び付けながら学校・地域づくりについて触れ考える機会にはなり、学校・地域づくりの学びへといざなうことはできそうだ。実務者が、UR、SKの2人について（2、3）（2、2）の評価をしているのも、カンファレンスの応答から評価しているところがある。

（表2）学校教育支援実習の評価

学生学年氏名		2年SM	2年HA
活動校		S小、M幼	H小、Y小、K小
活動時間		59.5時間	95時間
カンファレンス回数		2回	2回
評価項目	子ども理解	4、3、3	5、3、4
	授業づくり	4、3、3	4、4、3
	学級づくり	3、4、4	4、3、3
	学校・地域づくり	2、2、2	2、3、2
単位認定		1単位	2単位
資料（レポート）			資料5

※ 評価項目の表記：3は5段階評価の3を示す。

また、本年度から2年生は、学校ボランティア活動をして要件を満たした者については単位認定されることになり、2人の学生が対象になった。学校教育支援実習報告書とカンファレンスをもとにスタッフ3人が評価した（表2）。今回のスタッフは、3人とも実務者である。

全体をみると、2年HAの子ども理解について（5、3、4）と開きが見られる位で、そのほかの項目は同様の評価がされている。

評価の開きが見られたHAを例に、学びの内容と程度を項目ごとに検討してみよう。

2年生の「子ども理解」の評価は、「子どもに関心をもつ」を内容として、「子どもと話ができる」（発見）、「子どもの中に入り、行動を記録できる」（省察）、「子どもと共に活動できる」（創造）に広めていくことを到達としている。HAは、次のように記述している。

私は、この学校教育支援実習の経験を通して多くのことに気がつくことができました。まず第一に、普段から「授業がつまらない」「勉強がきらい」と言っている子であっても、「子どもは本来学びたがっている」ということです。授業中で何か分からないことがあると、担任の先生や私に不安そうな視線で訴えるなど、「分かるようになりたい」と思っているサインを子どもたちは示します。

と、子どもの表情の変化やサインに気づく。その中で、K君に注目し交流が始まる。

私がお世話になった学級においてはいわゆる「落ち着きのない（多動）」男子児童K君

がいて、突然訳のわからない奇行を繰り返していました。しかし、K君の行動を観察して、なんでそんな行動をしたのか考えていくうちに、K君の頭の中ではある刺激から突然の奇行まで一連の流れでつながっていて、ちゃんと理由ある行為であったことがわかってきました。

HAはK君を観察していく中で、多動の理由を推測し自分から働きかけ、K君と徐々に打ち解けていくようになる。子どもの中に入り行動を記録（省察）し、子どもと共に活動（創造）するのである。

3人はHAのカンファレンスにも立ち会い活動の様子も理解しているが、評価は（5、3、4）と分かれる結果になった。

次に、「授業づくり」についてみてみよう。「授業に関心を持つ」を内容とし、「子どもの発言や考えに関心をもつ」（発見）、「子どもの発言や活動を記録できる」（省察）、「子どもの学びを整理できる」（創造）を到達としている。

HAは、「教師の指導」については、担任の「みんなに分かってもらえるように説明してね」の言葉に注目して、子どもたちが理解を深めていることに気付いた。また、児童の指名の仕方にも注目して、全員の子どもが理解して授業が展開されていることに気付く。そして、「このような指導力は、教員を目指す上では必ず求められる能力の1つだと考えました」と、記述する。しかし、授業を教師からの視点で見ているが、子どもの視点からは語られていない。3人は、（4、4、3）と評価する。

「学級づくり」の内容は「学級の雰囲気わかる」を内容とし、「学級の雰囲気に気付く」（発見）、「子ども同士の関係を記録できる」（省察）、「子ども同士の関係を整理できる」（創造）を到達としている。レポートには、「休み時間の子どもたちの会話の中で、お気に入りの動画（アニメ、ゲーム実況等）についての話題が多かったことです」と子どもたちの話題に耳を傾け、「現代の子どもたちを取り巻く環境の変遷に改めて目を向ける必要があると考えました」と記述している。しかし、そこから子ども同士の関係性にまで考えが深まっているとは読み取れない。3人は、（4、3、3）と評価している。

「学校・地域づくり」の内容は、「教師の仕事に関心を持つ。学級と保護者の関係に関心を持つ」とし、「教師の仕事に気付く。学級と保護者の関係に気付く」（発見）、「仕事を分担して行うことができる。授業参観等に参加できる」（省察）「教師の仕事を整理できる。授業参観等に参加し感想を持つことができる」（創造）を到達としている。

レポートでは、活動内容に運動会補助や学習発表会補助活動を記述しているが、感想等は見られなかった。3人は、（2、3、2）と評価している。

学生の記述には見られなかったが、学校づくりのポイントの1つに同僚性と協働があり、2つに保護者・地域との連携協働がある。学生には体験もなく難しい項目であるが、これからの学校経営には欠かせない視点である。教員養成カリキュラムに加えたい内容である。

ここまでを整理すると次の2点がある。1つは、「実践力評価基準」の妥当性についてである。評価者によって評価が異なっているが、これは評価者によって項目の内容理解やハードル（基準）をどこに置くかという点で違いが生じていることが要因と考えられる。これから多くの学生のレポートを検討していくことによって、「実践力評価基準」の妥当性が

検証されていくだろう。

2つが、評価項目設定の有効性についてである。評価者からは、評価項目が簡潔な言葉で4項目に整理されているので、「実践力評価基準」が分かりやすかったという声が聞かれた。カンファレンスをしていて、何について話題にしているかが明確でないと深まらない。教室の出来事を広く4項目で把握し、そこから話題を狭めてしていくことで、探究課題が明確にすることができた。今後、各項目を教室の中で起きている具体的な出来事と結び付けて、学生が理解できる言葉にしていくことが求められている。

4 「教員1プロブレム」の課題－M小学校UR教諭の事例－

UR教諭（以下 UR）は、大学2年の夏休みから4年までの3年間、母校のF三小学校で学校ボランティア活動をしていて、今年度の4月から福島県教員として採用されM小学校に赴任した。

そこで、学校ボランティア活動をした学生が、初任者として学校現場でどのような力を発揮しているか、初任者に求められる実践的指導力とは何かを調査研究した。その成果を、教員養成カリキュラムや「実践力評価基準」に生かすのが目的である。

（1）学校ボランティアでの「学び」

はじめに、大学での学校ボランティア活動の「学び」について、4年活動後のレポートをもとに整理してみよう（資料4）。

URは、小学校教員になることをめざして本学類に入学する。2年になり、母校で何かできることはないかと思っていたところに学校ボランティアの掲示が目に入り、説明会に参加し、申込み登録する。1・2年は授業数が多く活動できる時間を確保するのが難しく、2年で活動する学生は平成25年度1人、26年度4人、27年度7人と大変少ない。そんな中、URは、夏休みを利用してF三小学校で2週間活動する。3年生の社会科見学の引率補助を行い、「先生」という立場に近づいたことを実感し、その後の3年の教育実習、4年の教員採用試験にも経験をいかすことができたと振り返っている。

3・4年になると、ほぼ1週間に1日小学校に行くようになる。そこで学校との信頼関係もつくられてきて、福島県の採用試験に受かった4年後期からは、補助として手伝いをするのでなく授業をするなど実践的な経験を多くさせていただくことになる。

URは、「授業をさせていただき、発問の仕方や板書の仕方、話し合い活動の取り入れ方など多くのことを改めて考えることができ、4月からの教員生活に生かせることばかりであると感じています。（中略）授業も、その他の教育活動も、実際に経験してみないと分かりたいことがたくさんあると実感しました」と書いている。それは、「自分に出来ること、チャンスをいただけることには何でも挑戦する！」という気持ちで取り組んだため、何事にも挑戦してみることで見えてくるものがあるとし、「自分自身もチャレンジ精神を忘れず学び続けていきたい」と結んでいる。

大らかで何事にも積極的に挑戦するURには、4月から始まる教員生活に少しの不安はあったとしても、何とか乗り越えられるだろうという自信のようなものがあつたように思う。

私たちはこのレポートやカンファレンスから、URを「子ども理解」(3、4、3,)、「授業づくり」(4、3、2)、「学級づくり」(○、3、3)、「学校・地域づくり」(○、2、3)と評価した(表1)。

授業実践をとおして発問や板書はできるようになったかもしれないが、「学級づくり」を含め毎日の授業を維持していくにはまだまだ目標に到達しているとは評価できなかった。

(2) M小学校調査研究

URは、4月1日にM小学校に赴任する。

M小学校の校長が筆者の知り合いという関係もあり、町教育委員会の承諾を得て調査研究を行うことになった(資料6-1)。

M小学校は農山村地域にあり、全校生214人11学級(普通10、特支1)の小規模校である。3世帯家族も多く、子どもたちは家庭や地域からも温かく見守られており、純朴で素直だが積極的ではない。URは、5年2組男子10人女子8人合計18人の児童を担当することになった。

4月下旬に調査依頼に伺ったとき、校長にURの様子を尋ねると、少し困惑した様子で、「よく泣くんですよ」と話された。初任者が1学期に泣くのは知っているのであまり驚かなかったが、「職員会議で泣かれたんですよ」と聞かされた時には、1か月前に期待を胸に笑顔で大学を巣立ったURの姿が思い返され驚いてしまった。調査は快く引き受けていただくことになり、その後本人の了解を得るために面談をすると、「何をするのか分からないままに、次から次へと進んでいくんです」と、本当にどうしていいのかわからない様子が見て取れた。大学と学校現場にどのようなハードルがあるのか、うまく接続する方策はないのか、調査の意義を強く感じた。

(3) 調査の概要

6月から1か月ごとに3月まで学校訪問調査を行った(表3)。

8時に登校し、校長と打ち合わせ面談を行い、学級朝の会から教室に入りビデオを設置し、URの授業を参観観察記録した。初任者研修のために社会科と理科が分科担任で研修の時間になるので、その時間を利用してURと面談相談した。その後給食を子どもたちと食べて、校長と打ち合わせ面談をして帰宅した。

6月15日の初日は、月1回1年間来校するというので、全校朝の会で紹介され、調査が始まった。

8時35分に教室に入ると、算数の授業が始まっていた。初任者指導教員のM先生も入っている。月曜日と金曜日の算数と国語の時間に入っているということだった。

めあては、「少数のかけ算をマスターしよう(パート2!)」と板書してある。少数のかけ算の練習定着の時間のようなのだ。教室では、私語がとびかっていたり出歩きがあったりし、雑然とし子どもたちは集中していない。まず、座席表を書き子どもの名前を一人ひとり書き込んでいった。

(表3) M小学校調査研究実施内容

訪問日	内容(授業参観・面談)	実践的指導力(課題等)	記録
4/27(月)	校長・UR教諭の承諾		
6/15(月)	算数、国語、学級活動、算数、面談	授業のイメージができていない。授業中の私語がめだつ。	①
7/10(金)	算数、国語、理科、総合、学年主任と面談	授業展開力と子どもの集中力が課題	②
8/31(月)	体育、算数、理科、国語、面談	「授業づくり自己診断」の提案 大きな成長がみられる。	③
9/14(月)	算数、国語、体育、社会、面談	テスト直しの意味が分からない。 「授業づくり自己診断表」の分析	④
10/16(月)	書写、校内授業研究会参観(2年算数)理科、社会、面談	子ども同士をつなぐ工夫をしよう。	⑤
11/16(月)	国語、校内授業研究(算数)、理科、体育、面談	授業力の向上、子どもに集中力が ついてきた。	⑥
12/7(月)	算数、国語、理科、体育、面談	授業に笑顔とゆとりがみられた。 個別面談をどうするか。	⑦
1/18(月)	算数、学級活動(初任研授業)、理科、体育、面談	学級活動の意味が分かった。	⑧
2/15(月)	算数、齋藤授業「詩を楽しもう」、理科、体育、面談	教師のルーティンが身についた。 グループ学習発見。	⑨ 資料6
3/4(月)	面談、アンケート調査依頼		

8時に登校し、校長と打ち合わせ面談を行い、学級朝の会から教室に入りビデオを設置し、URの授業を参観観察記録した。初任者研修のために社会科と理科が分科担任で研修の時間になるので、その時間を利用してURと面談相談した。その後給食を子どもたちと食べて、校長と打ち合わせ面談をして帰宅した。

6月15日の初日は、月1回1年間来校するというので、全校朝の会で紹介され、調査が始まった。

8時35分に教室に入ると、算数の授業が始まっていた。初任者指導教員のM先生も入っている。月曜日と金曜日の算数と国語の時間に入っているということだった。

めあては、「少数のかけ算をマスターしよう(パート2!)」と板書してある。少数のかけ算の練習定着の時間のようだ。教室では、私語がとびかっていたり出歩きがあったりし、雑然とし子どもたちは集中していない。まず、座席表を書き子どもの名前を一人ひとり書き込んでいった。

2校時は国語だがURの姿がない。子どもたちはざわついて、担任の来るのを待っているだけだ。URが戻り、女子が発熱をして家に帰る手配をしていたようだ。いよいよ授業が始まっても、ねらいと活動内容が明確に伝わらないために集中しない。

3校時は学級活動で、「係活動の反省をしよう」と話しかけ、係ごとに分かれて反省をし、全体で発表をし、残りの時間活動するという流れだった。4校時は、算数の単元テスト。給食は、ランチルームで縦割り班に入って食事をした。

5校時に空き時間のURと面談相談をした。URからは、まず分からないままに1日が過ぎ、1週間が過ぎ、1か月が過ぎていくという話があった。次に、子どもとの関係で、特に私語の多い3人の男子について話があった。3つめが、授業づくりについてだった。

1 つ目については、前もって計画を立てること、週指導計画（以下 週案）の活用を伝えた。2 つ目は、きびしく叱ることだけでは離れていくので、3 人は幼いだけで良さがあるので見つけること、男子のリーダーを生かしていくようにと話した。3 つ目は、ねらいを明確にしていくようにと伝えた。

校長に、面談のURの様子と3人の男子をほめること、リーダーを育成するように話したことを報告して帰宅した。

2 回目の7月13日は、夏休み前の学期末の時期だった。登校すると全校朝の会で、町水泳大会の壮行会が行われている最中だった。8時35分に教室に入ると、1校時が始まっていたが学級朝の会を行うように指示して始まった。子どもたちは、朝からあくびや「疲れました」などの声が出て、「関係ない話をするな」というURの声が交錯して落ち着かない。10分後算数に変わるが、ゴールの見えない指示や発問があったり、私語、子どもの話にURも付き合ったり、集中力の足りない授業だった。

2校時の始まる前に、T男が休み時間に3人の男子に靴を隠されて泣いて席に着いた。URは、「T男は謝ってほしいと言ってるんだけど」と謝るのを待っている。S男が3人に「謝った方がいいよ」と声をかけると、しばらくして3人が謝り授業に移った。3校時は、理科でURは職員室でノート点検を行った。4校時は、総合的な学習の時間で認知症について調べ学習をするのだが、子どもたちは何を学ぶのかが分からず学びにはなっていなかった。

昼休み時間に、5 学年主任のH先生と面談を行った。H先生は研修主任もしており、現職教育の課題とURについての調査が目的だった。

現職教育の課題では、子どもの考えを把握して練り上げる授業づくりに取り組んでいるということだった。URについては、学級づくりと授業づくりを課題にあげていた。5月の授業参観の授業では、H先生が校内授業研究で行った授業を提供しているといことで支援していることもわかった。この日は、URとの面談は行わなかった。

3 回目は、夏休み明けの8月31日に行った。「授業づくり自己診断表」（資料7）の活用を提案しようと意気込んで行った。まず、朝の校長面談で、趣旨を説明して了解をとった。これは、神奈川県立総合教育センターの『小学校初任者教育のための授業づくりハンドブック』（平成21年3月）を参考に筆者が作成した授業づくりのチェックリストで、URの課題を可視化・焦点化し授業改善に役立てるのがねらいである。

1校時は5 学年合同体育で気づけなかったが、2校時の算数の時間でURと子どもたちの学びに変化を感じた。めあてが明確で手順も示されて、子どもたちに集中力が見られたのである。4校時の国語も詩の授業だったが、子どもたちの学びが成立していた。私語も2人になり、URの対応も笑顔で切り返して軽く受け流し授業にひき戻そうとしていてゆとりさえ見られた。

昼休みの時間にURと面談をし、授業が変わったこと笑顔がよかったことを伝え、次回まで「授業づくり自己診断表」に書き込みをしておくよう依頼して帰った。

9月2日に、ゆっくり話ができなかったので、次のようにメールを送った。

1 学期より大進歩、すごい！というのが感想です。それは、UR先生がたえず笑顔で子どもたちに接し、子どもたちも安心して生活し、落ち着いて学習していたからです。1つは、授業中H男などの私語にも笑顔で切り返し軽く受け流して余裕をもって授業をしていたからです（できるようになったこと1）。2つは、算数も国語も「導入・展開・終末」という流れで進められていて、子どもたちが安心して受けていたからです（できるようになったこと2）。（中略）できていることを確認して次にできることをふやしていくといいと思います。（校略）

それに対して、URから次のような返信があった。

まだまだ課題は山積みですが、学校の毎日の流れがつかめてきて、子どもとの関わり方が分かってきて、子どもたちも私のことが分かってきて、自分でもなんとなく1学期よりも余裕が持てているような気がします。（以下略）

1 学期は、クラス替えで新しい関係性に子どもたちに戸惑いがあった。さらに初任者が担任となり、学級のまとまりや授業中の集中力が見られなかったのだろう。それが、夏休みが明け2学期に入ると、担任も教師の仕事に慣れ、子どもたちも子ども同士にも担任のURにも慣れて、互いに笑顔が見られようになったと考えられる。

9月14日（4回目）は、朝の活動から参観した。朝の会も静かに落ち着いた雰囲気の中で進行した。1校時算数は、テスト直しだった。1問目から順に最後まで答え合わせをして、2校時の後半までかかった。後の面談でURは、初任研担当のM先生にテストの結果が悪いからテスト直しをするようにと言われたが、どうやるのか分からないのでどうするんですかと尋ねても直すんだよとだけしか言われなくて、今もなぜやるのか分からないと言っていた。4校時は面談で、テスト直しの課題と「授業づくり自己診断表」をもとに、課題を話し合った。

自己診断表には、4（大変難しい）の項目が4点あった。1つが、「関係のない話をしてる児童がいる」である。これは4月初めから授業中私語の多い3人の男子をさすが、「Y平はよくなった。他の2人もよいところを探そう」と促した。2つが、「学習内容が理解できず、考えるのをやめてしまう児童がいる」である。これは主にM子をさすが、今日も「わかんない！」と言って訴えていた。分かりたいという声なので、スモールステップの手立てや具体物や道具を使うこと、子ども同士の「学び合い」などの方策を伝えた。3つが、「発表に対しての周囲の反応がなく1対1の受け答えになってしまう」である。教師が子どもと個別に応答しているからで、子ども同士をつなぐ工夫、聞きあう関係をつくるように伝えた。4つが、「学力・意欲が低い児童の点数が上がらない、学力テストに向けての学習の取り入れ方」である。これは、2つ目の課題と重なり、初任者だけの課題ではないと伝えた。その他に、「国、算は板書計画を單元ごとに立てるようにしている」や「字を雑に書く」「男子同士、女子同士でしか交流しようとしなない」「挙手しない児童も指名すれば発言できる」などのコメントを書いていた。

このように今の状況を文章に書くことによって、何が問題になっているかが分かり、今

できそうなこととしばらく時間が必要なものが区別できただけでも自己診断表が有効であったと考えられる。後に校長も「チェックリストで課題が整理でき、できることが増えてきたようだ」と評価していた。

10月19日（5回目）は、朝校長と面談をして教室に行くと、5・6年生合同で全校朝の会で発表する合唱の練習をしていた。美しい歌声がオープンスペースに響き渡っていた。その後教室に戻り学級朝の会を行い、1校時の書写に移った。URは、黒板に水筆で課題の「希望」と範書して、各自書くように指示し学習に入った。URは「先生、先生」の子どもの声に個別に対応している。途中M先生から「希」の筆順の指摘を受けて、一斉指導をするが、あとは個別対応だった。書写の基本的指導過程の習得が必要だ。2校時は、校内授業研究会で2年生の算数の授業を参観することになった。URも自習の指示を出して参観する。その間筆者は自習の様子も観察したが、高学年4クラスあるフロアで、5年2組が学習の取り組みが1番よかった。

4校時に面談をするが、URからは、「2学期はM小学校祭りや県学力テストなど、次から次へとやることもあり、バタバタしている。学力差がある」と話があった。「子どもたちが落ち着いてきている。自習がピカ1だった」と成長していることを伝え、「子ども同士をつなごう、子どもの力を借りよう」と話した。「授業づくり自己診断表」に続いて「縦糸・横糸チェックリスト」（学級づくり自己診断表）の活用を提案したが、関心を示されなかった。

11月17日（6回目）は、2校時にURが算数の校内授業研究の授業を行った。「単位量あたりの大きさ」の単元の1時間目で、教具の準備も万全に計画通りに授業が進行した。子どもたちも少し混乱したが、集中して取り組み発表もしっかりと聞きあっていた。ステップを低くしてわからない子どもに手がかりを与えたいという課題もあったが、よい授業だった。面談では、本人もこんがらかったと言いつつも、達成感と自信をもったようだ。

この授業づくりでも、事前に5年主任が自分の学級で行っていて、修正を加えて準備をしていた。改めて、学年や学校全体でURを支援していることが分かった。

12月7日（7回目）は、子どもたちの生活が一層落ち着いてきて、URも子どもたちにも笑顔が増えてきた。1校時は算数だが、めあて「三角形の面積の求め方を考えよう」の提示、既習事項の確認、自力解決、友だちとの交流「学び合い」、全体での確認、まとめと授業の骨組みがしっかりしていて、めあてとまとめも重なっていた。2校時は国語だが、めあて「自分なりの枕草子を書こう」の提示、例示、書く、読み合うと、指導の流れがしっかりとして、子どもたちも安心してしかも楽しんで学習に取り組んでいた。

3校時の面談では、個別面談の相談があった。来週から保護者との二者面談があるのだが、何をどうすればよいか分からないというのだ。先生方からは、子どものよいところと直したいところを書きまとめておいた方がよいと言われて準備はしたが、何のためにするのか分からない、これまで二者面談の経験がないのでイメージがわからないというのだ。そこで二者面談の意義と留意事項を説明するのだが、その他にも現職教育のまとめ方が分からないというように、学校はURの知りたいことに応えていないようだ。M小学校では、職員構成がURのすぐ上は30代と離れていてURの課題が身近な問題として受けとめられない環境にあるようだ。年代の近いメンターが欲しいと思った。

1月18日(8回目)では、URに教師としてのルーティンがついてきたと感じた。

1校時の算数では、指導過程、Y男の注意のしかた、机間指導の仕方に教師としての基本ができてきたことが感じられた。課題として、興味を引き出す課題提示やゴールを示すこと、定着のための問題量、ジャンプの学びなどがあるが、次のステップが見えてきたようだ。

2校時は、学級活動の授業を初任研授業として行った。「『正しい断り方』ができるようになろう」というねらいで、ソーシャルスキルトレーニングを活動する学習である。URは、面談で、これまで学級活動の存在、意義、内容、指導案の立て方が全く分からなかったと言っている。今回の指導案は、ネットで検索したようだ。学級活動は学級づくりの基本として、大学のカリキュラムに位置付けたい。

子どもたちは、3つのモデルからふさわしいモデルを選択して、ロールプレイングをして学んでいた。

3校時は、URと面談をした。学級活動の外に、音楽の授業の相談もあった。これは、音楽主任の指導を受けることを提案した。また、席替えについても話題になった。子どもたちにとって、月1度の席替えは今では一大イベントになっているようだ。ようやく学級づくりの入り口に立ったようだ。今は担任が決めているようだが、子どもたちに席替えのねらいとルールをしっかりと伝えて共に作っていくことが大切だと伝えた。

2月15日(9回目)は、グループ学習が話題になった。

朝校長から、音楽の研究授業で初任研が終了したが、3つのグループ学習がよかったという話があった。3校時の面談でも、URからグループ学習の取り組みが出た。

音楽主任から指導を受けて、リコーダーの練習にグループ活動を取り入れ、目標を「グループ発表会をしよう」としたら、子どもたちが熱心に練習に励んで発表会が盛り上がったというのだ。その後も、子どもたちは他の曲もグループでやるようになったと喜んで話してくれた。「グループ活動発見!」である。

3月4日(10回目)は、1校時から分科の授業が入り、URの授業が参観できないことが分かり、面談とアンケート依頼をして帰宅した。

URは4月当初を振り返って、「何も分からなかった。知っている人も土地も分からず、何をしたいのかも分からなかった。でも、今は何をするのが分かり、相談する人もいるので安心です」と話してくれた。URの教師としての成長を見ることができた。

(4) 大学と教室をつなぐ実践的指導力

初任者URと校長を対象にアンケート調査を行った。

① UR

問い1は、大学でやっておいて良かったこと・役立ったことを、「実践力評価基準」の項目をもとに思いつくことを書いてもらった。

「子ども理解」では、生徒指導論をあげ、「児童虐待などのケース会議について学べたことで、子どもの背景には様々な問題があることに気付けた。実際にケース会議をすることもあり、役に立った」と書いている。子どもたちを取り巻く環境は厳しくなっていて、農山村地区でも様々な問題が出現している。人権意識を研ぎ澄ますことと具体的な対応とが

求められているといえる。

「授業づくり」では、各教科の学習指導論をあげている。「教材分析や指導案作成、模擬授業などを行う授業は、実際に生かすことができる技術を学ぶことができた」と書いている。各教科のねらいや基本的指導過程は、授業づくりの基本として必須である。

その他として、「キャンプを企画した経験を、宿泊学習を計画・引率に生かすことができた。特にキャンプファイアの担当をしたこと。特に宿泊学習の引率補助の経験は上と同様に役立った」と書いている。URは、F三小でのボランティア活動で、2泊3日の尾瀬体験学習に引率補助をしていて、さっそく役立ったようだ。

「学級づくり」「学校・地域づくり」「教育の意義や目的」は、空欄だった。

問い2は、大学でやっておけば良かったことを尋ねた。

「子ども理解」では、子どもがかかりやすい病気や起こりやすいけがをあげている。「保健の先生が不在のときなど対応を求められるが、子育てのしたことがないため、何をすればいいのか困ることがあった」と理由を書いている。

「授業づくり」では、「模擬授業の機会や実際の教育現場での授業をする機会がもっと多いと現場で役立つと思う」と書いている。大学で人一倍学校ボランティア活動をしていても、もっと授業を見ておけばよかったと感じているのだ。

「学級づくり」では、学級活動について、「学級活動をどう行えばいいのか、指導案の書き方はどうなるのか、現場に出てから自分で学ぶしかなかった」と書いている。各教科の授業だけでなく、学校教育活動を俯瞰する学びが必要とされる。

その他として、接客業などのアルバイトをあげている。「様々な年代の方と接する経験があまりなかったため」と書いている。保護者や地区の人たちとの交流があるときに、コミュニケーションの取り方に悩むことが多いのだろう。

ここでも、「学校・地域づくり」と「教育の意義や目的」については、空欄だった。

問い3は大学への要望だが、「特別支援学校の応用実習期間が、教員採用試験の日程と重なっており勉強時間も削られて体力的にも精神的にもきつかったので、試験にも配慮して学生の学びをサポートしてほしい」と書いている。大学運営では、学生の声に耳を傾ける必要がありそうだ。

問い4は、教師としての思いを尋ねた。

まず、うれしい出来事を尋ねた。そこには、「子どもが授業で分かりやすいと言ってくれたとき。授業のねらいにあった感想などを子どもが持ってくれたとき。男女仲良く活動している姿など見られたとき。大きな声で注意しなくても、子ども同士で声をかけあって取り組んでいたとき。先生が担任でよかったと言ってくれたときなど」と書いている。

次に困ったことを尋ねた。そこには、「繰り返し指導しても学習内容や生活態度が身につかないとき。高学年女子特有のもめ事が生じたとき（保護者からのクレームも含む）」と書いている。初任者だけでなく、教員ならだれでもが悩む課題である。

先生方との関係を探ると、「まあまあうまくいっている」に印をつけて、「分からないことはすぐ聞くようにしている。先生方もどんどん教えようとしてくださる」と、同僚として良好な関係ができているようだ。

同じように保護者との関係を探ると、「まあまあうまくいっている」に印をつけて、「あ

まり協力的でない保護者もいるが、いろんなことにどんどんチャレンジしてね！協力するから！と言ってくれる保護者の方が多い」と書いている。保護者ともうまく関係性ができているようだ。

地域についても尋ねると、「まあまあ住みやすい」に印をつけて、「生活に困ることはない。今年は雪が少なかったが、来シーズンは同じではないと思う。子ども・保護者と買い物をしているときに会うことがよくある」と書いている。気軽に声を掛け合うような関係性を築いていってほしいと願う。

次に教師の仕事について尋ねた。大学生のときは「忙しいけれど楽しい、体力が必要、勉強をずっと続けていかなければならない」と書き、現在は「忙しいけれど楽しい！！、体調管理が大事、勉強を続けるのも楽しい。学ばなければならぬことが多岐にわたっていて学びきれない」と書いている。充実感にあふれていて頼もしい。やはりチャレンジ精神旺盛な持ち主だ。

最後に即戦力について尋ねた。「子どもたち・先生方・保護者・地域の方々とコミュニケーションを取ることができること。分からないことは分からないと聞けること。自分に出る仕事はどんどん引き受けること。学校の大まかな流れが分かっている、行動できること」と書いている。今直面して悩んでいることが素直に見て取れる。

② 校長

問い1は、学校が求める教員としての実践的指導力について尋ねた。

- まずは授業力。教科指導は勿論、道徳や学活などにおける「目標」「内容」「方法」について、基本原則を身につける。
- 学級経営力。望ましい集団を育てられる手立て、子ども理解力、生徒指導力など。
- 職員や保護者との良好な人間関係を築けるコミュニケーション力。

問い2は、大学で養成してほしい内容を尋ねた。

- 上記の現場に出て求められる基本的な教師力

問い3は、大学への要望や意見を求めた。

- 模擬授業は、代表者だけでなく、全員が複数回できるようにしたい。
- 現場を経験できる機会を増やすこと。ねらいを絞って実習効果を高めること。
- 現場に出れば大卒であっても一定レベルの指導力が求められるので、大学においてある程度の力が育めるようにしてほしい。

校長は、学校経営の立場で、今教師に求められる資質能力として「授業力、学級経営力、コミュニケーション力」をあげている。大学には基礎的教師力育成を求め、学生には実践的な学びを体験し、一定のレベルに到達して現場に出てほしいと願っていることがわかる。

5 実践的指導力と「実践力評価基準」の関係

(1) URの実践的指導力の成長

5年2組は、1学期落ち着かなかった子どもたちが、2学期以降落ち着きを見せ成長していく。このことを、URの実践的指導力が高まったと評価することができる。その視点で、

成長の要因を整理してみよう。

1つが、赴任当初は何もかもが新しい環境で、何をどうしてよいのか見当がつかなかった状況を克服したことだ。1日先が見えないということは、1日の学校生活の過ごし方から授業の進め方が分からないままに、毎日新しい出来事が起きてくるということである。初めのころの戸惑いが理解できる。それを、URは、週案を作成し国語と算数の毎時の板書計画を立てることで克服する。週末に翌週のスケジュールを整理することで、授業の内容を確認し子どもの行動を把握することができた。このことによって、少し先の自分の行動が分かり安心して活動できるようになるのである。

2つが、授業の基本的指導過程をつかんだことである。教科指導は単元をまとまりとして1時間ごとのねらいが定まるが、週案を書くことによって1時間のねらいが明確になり、授業が管理できるようになった。

3つが、「授業づくり自己診断表」で、授業課題を自覚し分析をして原因をつきとめ、具体的な解決方法を考え対応したことである。調査に入った6月から3人の男子の私語が気になっていたが、URも気になっていたようだ。そこで、なぜ私語が起きるのかを分析し、今できるところから始めてみようとしたところ、毎時間子どもたちを引き付ける授業をすることは無理なので、3人の良いところを認めることから始めてみるようになった。効果はすぐに表れなかったが、徐々に3人の男子は落ち着いて学習に参加するようになった。

4つは、学級をまとまりとして見られるようになったことである。6月に、どうして学級目標がないのか尋ねたところ、子どもたちが必要ないというからいらぬということだった。1月に学級活動の授業を行うことになって、初めて学級について考えるようになったというのである。大学で学級経営の講義を受ける機会もなく、学級を子どもたちが偶然に組み合わさって生活している集合体という程度の認識で、意図的に学級を作ろうという意識はもたなかったようだ。子ども同士の大きなトラブルもなく、穏やかな仲の良い子どもたちなので意識することもなかったのだろう。「正しい断り方ができるようになろう」というソーシャルスキルトレーニングの授業だったが、授業を計画する段階で、学級づくりの大切さに気づいたようだ。

5つ目が、保護者との関係形成についてである。12月に個別面談の目的について相談を受けたが、子どもについて担任と保護者が情報を交換しあって子ども理解を共有し、力を合わせてよくするためにあると説明し理解されたようだ。その後うまくいったという報告を受けたが、アンケートにもあるように保護者と良好な関係ができているようだ。これなども、養成カリキュラムの課題の一つである。

(2)「実践力評価基準」から見たURの成長

URの成長を「実践力評価基準」をもとに整理してみた(別表2)。項目ごとにURの成長の様子をみてみよう。

「子ども理解」では、子どもの特性を捉えて一人ひとりと向き合うというよりは、騒がしい子、大人しい子、できる子、できない子というような漠然とした捉え方をしているようだ。3人の男子の授業中の勝手な私語に悩まされるのだが、ルールを守らない子、話を聞かない子と捉えてそこから理解が深まっていかない。面談のたびに3人のよさを見つけ

ようと尋ねたが、よさが言葉にならなかった。12月に個別面談の意味を理解して、少し一人ひとりの個性を見分けることができたようだ。

1学期に参観観察をしていて、笑顔がなくなただ黙々と静かに授業を受けている女子が気にかかった。後で学年主任から、女子が男子がうるさいと相談を受けていたことを知るのだが、静かに授業を受けているから素直な子どもたちとするのではなく、子ども一人ひとりの声に耳を傾け聞き取ることが大切になる。そうすれば、女子の関係性も「高学年女子特有のもめ事」と突き放したような理解から個別の理解に深まり、解決の糸口も見えるようになるだろう。

「授業づくり」では、週案や板書計画をたててスケジュール管理をしたこと、各教科の基本的な指導過程を身につけたこと、「授業づくり自己診断表」で授業課題を整理し方策をたてて取り組んだこと、グループ活動発見など、授業運営について成長が見られた。年間指導計画にそって、教科書と指導書をもとに授業ができるようになった。これからは、何のために学ぶのか、何を学ぶのか教える内容と方法の探究が求められる。

「学級づくり」では、「学級」ははじめから「在る」もので「創る」ものという認識を持っていなかったのではないだろうか。学級朝の会も帰りの会、係活動、児童会活動も在るからやるという、習慣の一部になり問い直すことはなかったようだ。子どもたちの係活動の反省も、上手くできたかできないかの反省で、こうしてほしい、こうしようという提案は見られなかった。1月に初任研で学級活動の授業を行い、初めて「学級」に気付くのである。しかし、それもまだ学級活動の授業の運営のレベルである。学級目標がないのも気がかりだ。こんな学級にしたいという思いを持ちながら、子どもたちと共に創りだして行ってほしいと願う。

「学校・地域づくり」は、観察記録の中からは見つけることができず空欄になった。運動会などの学校行事や地域の祭りなど初任者にも地域との接点はあるはずだが、URにはあまり意識されていないようだ。アンケートで地域はどんなところか尋ねると、まあまあ住みやすいと思っても、それは自分にとって住みにくいところではないという評価で、学校や教育活動との関係には及んでいない。大学時の「実践力評価基準」評価やアンケートの「学校・地域づくり」の空欄と重なるところだ。学校と地域との連携協働を考えたときに、学校と地域を関連付けた養成カリキュラムが求められそうだ。

6 教室のルーティンにつなぐ課題

URの調査をとおして、初任者にとっての実践的指導力の成果と「実践力評価基準」から見た成果とが一致するわけではないことが分かった。そこから見えてくる教室のルーティンをつなぐ「実践力評価基準」から見た実践的指導力を整理してみよう。

初任者に求められる実践的指導力とは、週のスケジュール管理や授業づくり、学級づくりができる、同僚や保護者との関係性がつくれるといった、基礎的な教師としてのルーティンができることにあるようだ。また、これは初任者自身が求める実践的指導力でもある。初任者といえども学力だけでなく、いじめや不登校など生徒指導についても一定の成果が求められる。しかし、教室の出来事の現象の面だけでなく、授業づくりや学級づくり、コミュニケーションの背景にある教育理念を基盤としてしっかり持っていることが重要なこ

とも分かった。

URは、即戦力の一つに「学校の大まかな流れが分かっていて、行動できること」と書いている。URは、目の前の1日だけでなく、1週間1ヶ月1学期先を大まかに捉えることが大切だと言っているのだろうが、このことは1週間1ヶ月1学期の子どもの成長した姿を描くことが大切だと言っていることでもある。しかも、理念としてだけでなく、具体的な行動として身に付けることだとも言っている。

それでは、大学でこのような理念をどのように学ぶことができるのだろうか。

学校ボランティアは、学校の出来事を観察し活動し課題を見つけ省察しまた観察し活動する、「観察・活動・省察」を繰り返す、まさにアクティブラーニングである。

学生は、自主的・自律的に学校ボランティア活動をとおして、教室の出来事を「実践力評価基準」をもとに整理する。そして、カンファレンスをとおして実践と理論の往還をしていく中で、これまでの教師像を真似るのではない、こらからの新しい教師力が形成されていくことが期待される。

「実践力評価基準」の研究は始まったばかりである。URは、アンケート調査用紙の欄外に、「(訪問時に) 毎月褒めていただいたり話を聞いてもらったりしてちょっとずつ成長しているのかなと自信を持つことができました」と書いている。URの教師力を「実践力評価基準」というのものさしで測定しその距離を評価するのではなく、URの「気付き」からスタートしてカンファレンスをとおして「学び」を積み重ねていくことが大切だと言っているように聞こえる。URは続けて「何を言っているのかよく分からなかった職員会議も、今では記録を担当することも出来るようになりました。2年目は負かされる仕事も増えるし、卒業学年ということで今年度以上に気合を入れて頑張りたいと思います」と期待と希望を書いている。それが一番の成長のように思える。

「実践力評価基準」は、新しい「子ども観・教師観・学力観・学校観」に基づいた「授業づくり」「学級づくり」「学校・地域づくり」指標案である。今回の調査で、学校ボランティアと教室をつなぐ指標として役立ちそうだという手応えを感じた。今年も多くの4年生が教員として子どもたちと出会う。未来の社会を担う子どもを育てるために、大学の教員養成と教室の子どもたちをつなぐ実効性のある指標になるよう探究していきたい。

引用文献

- 1 由布佐和子「10 教員養成の改革」『日本の教育改革』放送大学教育振興会 2015年3月 pp.156.
- 2 時田詠子「教員養成課程における『実践的指導力』の捉え方に関する一考察—当事者の捉え方の違いに着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 17号—1』2009年9月 pp.257.

学校ボランティア・学校教育支援実習に参加した 学生との対話から考えたこと

福島大学研究員 荒木藤夫

はじめに

本学で教員免許を取得しようとした学生は、福島大学人間発達文化学類発行の『教職履修カルテ』(2015)⁽¹⁾に基づいて授業科目の履修を決める。その p.22~p.25 に次の表記がある。

- 1 学類の教員スタンダードに基づく自己診断
- 教員の仕事は、校種、学校規模、担当教科などによって大きく異なりますが、「学類の教員スタンダード」では、教員として共通に必要な専門性を次のように4つの領域で考えています。
- I 教員の自立と使命感（教員としての自覚と使命感、教員に対する情熱を強く持っていること）
 - II 授業づくりと学びの創造（教科内容や指導法に精通した、「授業づくり」の専門家であること）
 - III 幼児児童生徒の理解と指導（幼児児童生徒の人間的な成長や発達を支えていく、「人づくり」の専門家であること）
 - IV 教職員の協働と学校づくり（教職員同士や地域との連携を進める、「学校づくり」の専門家であること）

これは、上記4領域に2~4の項目を設け全部で13項目として表し、大学2年後半~4年後半5段階を評価対象としたものである。これら13項目を基に作成した「福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価規準（試案）」を基に、学校ボランティアや学校支援実習の事前指導・カンファレンス・事後指導等を行った。

私が担当するのは、2年生で学校教育支援実習に参加し2単位認定された女子。及び、3年生で単位認定はなく学校ボランティアに参加した女子についてである。二人から聞き取った内容を中心に、下記に述べる。

なお、学生の実践力を評価するにあたっては、学生の所属、活動校、活動期間、主な活動内容、カンファレンスの概要を記述し、最後に成果と課題を示した。

I HIさんの事例

- 1 指名・学年/所属(HI 2年 人間発達専攻)
- 2 活動校(福島市立金谷川小学校、伊達市立梁川小学校、双葉町立双葉南・北小学校)
- 3 活動期間・日数・時間・単位
平成27年5月23日~27年11月11日(17日間、95時間) 2単位
- 4 主な活動内容

(1)1日の活動の様子

□双葉南・北小学校(1日=6時間活動)

両校と幼稚園も含めた合同運動会補助を、朝から運動会終了まで活動。

内容としては、会場設営準備、片付け、司会進行、ゴールテープ持ち、競技参加、園児の引率・誘導等、あらゆる役どころの活動を行った。教師の指示を受け、誠実に活動を行った。

□梁川小学校(1日=7時間活動)

オープンライブラリー補助活動を朝から1日(7時間)活動。

図書整理、学級図書の選択・運搬、図書館の掲示物の貼り替え。さらに、装飾品の作成、図書のラベル・シールの貼り付けを丁寧に行った。

□金谷川小学校(15日間=82時間活動)

78時間授業に参加し、理解が遅れている子どもへの学習補助を中心に活動した。さらに、ALTや担任の指示を受けての指導補助や教室内を巡回しての学習状況把握を行った。

4時間は、学習発表会の会場準備・演技発表の準備補助・片付け補助・子どもの誘導・子ども係として子どもの鑑賞サポートを行った。

(2)どこに注目して活動していたか

- ・子どもたちの授業中、休み時間における活動の様子
- ・教師の言葉に対する子どもたちの反応
- ・子どもたちが、日常何に興味をもっているか。学問、アニメ、その他何でも。
- ・教師の問いかけ、指導の工夫について

(3)課題を持って取り組んだことなど

- ・子どもの興味・関心にとことん付き合う。
- ・できるだけ多くの時間、子どもたちと関わる。
- ・教師の子どもへの指導に対して、自分なりに意味を考える。分からないことは、一人で解決したつもりにならないで、正直に教師に尋ねる。

5 カンファレンスの概要

(1)話題の内容、及び評価基準の視点で学生のボランティア活動等を深めるための支援。

①2単位取得のための80時間の実習に終わらず、可能な限り継続してボランティア時間を重ねている姿勢を評価するコメントを与えた。P.1の履修カルテや評価基準表を基本資料としながら、子どもに「何を言ったか」「何をしたか」具体的観点を決め毎回課題をもって継続観察するよう示唆を与えた。

②再度支援室に来た際に、細かな記録を持参して、与えた示唆に対して与えた誠実に対応して取り組んだ足跡が認められた。

(2)話題がどのように展開したか

①双葉南・北小学校

○95時間が、すごく長くも感じたし、逆に終わってみれば短くも感じた期間だった。双葉南・北小学校は、福島第一原子力発電所の爆発事故で地元に住めなくて避難して

いる小学生 6 人と幼稚園児 3 人合計 9 人の運動会を支えるために、大学生 30 人が協力してのイベントだった。避難している子どもたちに、少しでも良い思い出を作ってもらおうとの思いで参加した。

上記参加理由を聞き、参加しようとしたきっかけになった思いについて価値を確認した。

○人数が少ないために、活動が制限されることが多くなるのかとっていた。しかし、一人一人が、自分の責任分担を自覚して主体的に活動する姿を見て、参加者がどんな思いに立って活動に参加するかで困難な条件も緩和されると思った。

上記の話を受けて、少人数は少人数なりに、大人数は大人数なりに子どもをいかに意欲的に活動するか構えを持つことが大切だろうと確認し合った。

②梁川小学校

○図書館で児童との交流はなく、図書館司書の指示を受け図書整理だけだった。コミュニティホールは、保護者に開かれていて活用できるシステムになっていた。開かれた学校にしているとの話を聞いた。図書館で目立つところは、「放射線の秘密」・「原発」コーナーなどで、福島県の置かれた状況を物語っていると思った。

上記の話を受けて、今多くの学校で司書教諭や月に週に数回勤務する司書によって図書整備が進んでいること、子どもたちに、できるだけ多くの本を読んでもらうための整理や働きかけがある事実を伝えた。また、大学生が学校ボランティアしたことも、子どもたちの学習や読書意欲に役立っているだろうことを伝えた。

③金谷川小学校

○特に指導を要する K 君とのかかわりについて、たくさんの事例を語った。

K 君は、多動性障害と診断され、時に奇声を発する診断情報と違わない子ども。2 年の後期から発達の支援を始めた。

休み時間の遊びや給食を一緒に過ごすように努めた。パソコンが好きで、ゆっくり動画の主人公が叫ぶのを真似て奇声を発する。また、メインキャラクターが動く様子を「うわー、あぶねー」「じゃねえよ」など、語尾に特化して反応する。「ゆっくり 動画」や「ゆっくり U-TUBE」などにも敏感に反応する。分かろうとすることが大事だと思う。

上記の説明を受けて、発達障がい、一人ひとり障がい状況が違うので個別に何をどう支援するか「個別の指導計画」が必要になり、継続観察しながら支援内容も時には軌道修正して変える必要があることを説明した。

○K 君は、学級の中でおもしろい子どもとして認識されている。このことは、担任の先生の指導の賜と感じる。先生の K 君とのかかわりを下記に拾ってみる。

*C「先生、ノート」……T「先生は、紙ではありません」

*T「敬語で言ってください。」

*T「その言葉、ギザギザ言葉。言っている方はよくても、聞いている方は気分良くない。ふわふわ言葉の温かい言葉の方がいいな。」

二人のやりとりを聞いていると、聞いている方も自然に笑顔になっていた。K君は、自分を尊重してくれる先生が大好き。やることは大雑把だが、勘がするどいところがあり、雰囲気を感じることができる。「S先生、こわいけど大好き」と、授業が上手で時に厳しく・時に優しい先生を嫌わず好きになっている状況を確認できた。

上記の話を受けて、教師の人格が子どもの成長にもろに作用することがあること、担任に対する思いが子どもの学びに大きく影響することがある事例を示した。

○教師の自由時間・休憩している姿が見られない。ノート指導、採点、・・・。

テスト採点では、「もうちょっと!」「次こそは」等やる気を出させる愛情こもった言葉かけを何回も見取ることができた。

上記話を受け、担任がする働きかけの多岐にわたる取組を示した。『現役教師が活用する仕事術』(ぎょうせい)⁽²⁾を紹介した。

○金谷川小学校での取組について、「子どもとの関わりが進行している段階で、自分の感想を文でまとめると」と尋ねると、3つの五七五・五七五七七の文にまとめあげた。

①「○○○君　たくさん手を挙げるし　よい返事!」

②「○○ちゃんは　とってもやさしくて　頑張り屋さん」

③「18人の『らしい』をみつけ!　これからも

たくさん話そうね　なんでも聴きたい!!」

子どものよさ・頑張りに目を向け、プラスの評価を積み重ねている。話を聞いていても、自分から子どもたちの中に溶け込もうとしている様子が繰り返し読み取ることができた。

単に、単位を取るための取組ではなく、自分が教師になるために「配属学級の担任からも積極的に学ぼう」としている言動が頻繁に確認できた。

3校での取組を通して、2年生にもかかわらず子どもをプラスの視点で見つめるよりよい取組をしているので、3年次教育実習や学校ボランティアでさらに成長するよう期待したい。

II NYさんの事例

1 指名・学年/所属(NY 3年 人間発達専攻)

2 活動校(伊達市立伊達小学校)

3 活動期間・日数・時間

平成27年5月19日～27年12月15日(14日間、63時間)

4 主な活動内容

(1)1日の活動の様子

□朝 8:00 に出勤すると、教頭先生から「学校が、その日に支援に入ってほしい時間・学級を明示したプリントを渡された。その活動表には、支援してほしい内容も記載されている」(注1)ので、その計画に従って活動してきた。

※(注1) 例えば、「3年生の学習支援」/「3・4年生の学習支援」/「全学年の学習支援」等の表記に加えて、○年□組算数の学習支援・その内容等詳しく記載。

□時間割の5時間や6時間終了までの在校時間のうち、時に、6校時終了後の居残り指導も実施。

実際の授業中の活動として、算数、体育、図工、理科などたくさんの教科のサポートを行った。

(2)どこに注目して活動していたか

初め、自分の立ち位置が分からなかった。担任が紹介してくれて、子どもも自分も意識が変わった。教師の適切な言葉を媒体として自分と子どもの関係が改善されたので、教師の言葉のかけ方について意識して活動した。

子どもたち同士によりよいコミュニケーションの取らせ方について、学びたいと思いながら活動した。

(3)課題を持って取り組んだことなど

「今の公立小学校って、附属小学校と比べたらどんな違いがあるのかな。」

「子どもは、どんなところでつまづくのかな」

「子どもが、望む支援って何かな」

「一時間の授業を進める際に、各段階での教師の意図が何か分かるかな」

「公立小学校が抱えている具体的な問題は何かな」

上記5点について知りたいと思い、ボランティアに参加してきた。特に、見る視点として、「自分が教師だったら、発問は？、ノート指導は？、板書は？、・・・」となすべきことがたくさんある中から視点を絞って（スモールステップで）学んでいこうと決めた。

5 カンファレンスの概要

(1)話題の内容と、評価基準の視点で活動を深めるためにどのような支援をしたか

2年生と違い、教育実習を経験した学生がボランティアをしているので、子どもと教師を見る視点が絞られていた。評価基準一覧表の中の項目を確認して、さらに読み合わせをして意識化させた。

(2)話題がどのように展開したか

①担任の先生によって、授業の進め方が大きく違う。

Q：分かったことを文章化して本時のまとめをするのではなく、個々の進みが異なる状態でも特に対応策をとらずに授業を終える先生がいる。このままで、いいのかと思う。附属小学校では、1時間ごとに授業が完結していた感じがあったが、公立学校ではまとめがない先生もいるので、他の公立学校はどうだろうと思った。

A：「はじめ・中・終わり」「導入・展開・終末」など、子どもたちへ形式になじませる必要がある。マンネリ化に陥らないように、内容に応じてはオープンエンド形式で終わり次の時間につなげる考慮等は意味があるだろう。

附属小学校と公立学校の違いは、教師の力量の差でもあろうかと思う。反面教師

ではないが、自分がよいと理由づけした教師を見習った方がよいのは当然なことを確認させた。観察の視点が、マイナス(以下も)多し。プラスの見取りが必要では。

Q：展開の終わりの方で、疑問を出させ不自然な形で進め、まとめがなされていない。

A：課題があつて、対応するまとめがある構造的な板書づくりに努力する必要がある。課題提示、板書、発問等、どれをとってもライフワークになるような追究課題になりえる。ある授業を見て、おかしいなと思ったら、「めあて」から子どもの思考の流れで振り返り、素直に無理なく理解できるかどうか善し悪しを判断して評価・吟味していくといいと話した。いい視点に気づいたことを称賛した。

Q：授業に盛り上がりがなく、こなしている感じがする。楽しさを感じない。

A：担任の先生方も、それなりに工夫はされていると思うが、学生の眼にそう見えたり感じたりさせるようでは努力が不足かなと思う。ここも、反面教師としてとらえ、4年生の教育実習や教員採用試験対策としても、自分でよい授業について整理してまとめておくと役立つことと確認させた。(ここも、マイナス視点)

(3) 学校ボランティアをしてよかったこと

①小学校の抱える問題として、温泉施設に年に1か月程度巡ってくる旅芸人一座の子弟の件がある。旅から旅へ、そして転校の連続で学力がついていない。個別にしっかり実態把握をして、個別指導をしないと授業についていけない。先生が手のほしいところに手を届かせるのが、学校ボランティアの仕事かなと思い、接してきた。意識的に接した後、一座の子とコミュニケーションがよくとれてよかった。

上記を聞いて、福島市の土湯温泉での指導例を想起した。教師が、折に触れ指導するとともに、同級生に援助をもらうのも有効だった例を話した。

②算数についていけなかった子が、つきっきりでサポートしたら、授業最後で「わかった人」という教師の問いに挙手をして正解。満面の笑みを見たときはうれしかった。

そんな笑顔を見る楽しみも、教師を志す理由の一つに成り得ることを共に確認し合った。

③長期に渡って断続観察したところで、担任教師の指導力アップに驚いた。

3年1学期、月2回午前中だけという学校ボランティアから、夏休み明けの9月からは1日参加になったところで、学級の雰囲気の違いに気づいた。それは、教師と子どもたちの信頼関係がよくなっていたのだ。学級編成替えがあったばかりの5月、担任教師は子どもの心をつかむのに自信なさそうに見えた。私は、6月に教育実習があり学校ボランティアに行けなかった。久しぶりの9月、先生の指示でてきばきと動く子どもの姿に、子どもの成長とともに教師の指導力がアップしたのを肌で感じる事ができた。

上記の話のように、学級の子どもと教師がよりよく馴染んでよりよい人間関係が

形成されると、学級の歯車がプラスに作用する例が多いことを話した。自分の肌で感じたよい例を、学校現場で直接生かすことができるようにしてほしい旨話した。

④学年の発達段階などの変化が見えること

学校ボランティアで、学年学級固定ではなくいろんな学年を見させてもらっている。おかげさまで、学年の発達段階の違いが見えて、学校全体の子どもたちが見えてきたように思う。4年になったら、学校ボランティアの学年を決めてもらって活動したい。

上記話を受け、学校ボランティアにおける学年固定も、学年別も、一長一短。何が分かったか、文章と音声表現による振り返りをしっかりしながら参加してほしい旨要望した。

⑤合同体育で学んだこと

体育の跳び箱の授業を体育館で、学級ごとに習熟度別指導を行った。1組だけができない子どもがひどく多い。1組の担任は、

「両足着地しなさい」

など、注意するタイプじゃなくて優しい感じの教師。2・3組は、怖い感じの指導。しっかり教えることで、けがの予防にもなる。しかることも大切。両足で着地できていない1組の子ども。けがを防ぐのは、日々の着実な指導しかない。

今後、子どもの成長・変化をよく見て、よい点はほめて、子どもとプラスのコミュニケーションをとっていきたい。

上記のように、教師・子どもを共によく見ている点称賛した。特に、実技指導はケガにもつながるので、ポイントを絞って適切な指導が必要な点再確認し合った。

Ⅲ 事例1と事例2を踏まえた整理

1 「学び」の内容と評価基準の見直し

『福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準』では、大学2年生から学部卒大学院生までの4年間で4段階として示した。各学年「子ども理解」「授業づくり」「学級づくり」「学校・地域づくり」の4項目で、16種類の項目が列記されている。

学校ボランティアは、2年生から始める学生ばかりではなく、3学年で初めて参加する学

生もいる。また、短期集中して参加する学生と断続的に長期にわたって参加する学生、さらには1日中参加と午前限定参加など活動形態も様々である。したがって、学年で内容に系統性を持たせてははっきりと区分けできる文章表記するのは、なかなか難しい作業だと思われる。また、2年生の評価基準『発見』に示した「子どもと話ができる」「学級の雰囲気気づく」「教師の仕事に気づく」等を、1～5の数値評価するのは主観に左右され難しいと思われる。

さらに、平成26年度評価基準表の内容文面から見直すと、評価規準^(注2)(ものさしの種類)としての色合いが強く、評価基準(ものさしの目盛り)までは示すのは難しいと思われるので表記変更を図る必要があるとして検討し再提案したい。

学校ボランティアは、現場の学校にとっては、多動な子どもや学習の遅れのある子ども

への個別の支援等を求めたいし、大学は現場教師の実践的指導力に触れさせたい考えの錯綜した位置づけにある。

つまり、子どもに対して支援をする際には、児童理解が基盤になるのは適切である。お手伝い・支援的なボランティアに参加している中で、「授業づくり」や「学級づくり」を見取り・理解することはハードルが高いのではと検討した。

※注 2) 評価基準と評価規準の違い：

「パソコンの授業」というのがあったとして、その授業の目標がいくつか決められます。「キーボードの操作を覚える」「ワープロが使えるようになる」「メールが使えるようになる」等々で、さらにワープロの操作は「文字を打ち込む」「カット&ペーストが使える」「文字飾りができる」「マクロが使える」のように細分化し、いくつもの評価観点を作る、これが「規準(ノリジュン)」。これに対し、それぞれの「規準」をどれだけ達成したかを測るのが「基準(モトジュン)」。「文字を打ち込む」というものさし(規準)に対し、それが1分間に50字か、100字か、という「目盛り」を与えるのが「基準」。したがってこの場合、成績というのは、一つの教科であっても、〇〇の観点からは5、△△の観点からは3、といった調子でつけられる。つまり、観点を与えるものが規準、数字をはじき出すものが基準となる。

(「評価基準」 <http://soudan1.biglobe.ne.jp/qa337364.htm> 2016.3.7 アクセス)

2 学校ボランティア活動(教員養成を含む)の今後の展望と提案等



インターンシップの授業(算数科)

1日の流れを体験したり授業を体験したりする時間の確保が図られたら有効な経験になると考えている。実際に、地教委とある学校の理解を得て、平成27年度末に試行実験的に4年生2名によるインターンシップを1週間実施している。これが、教育実習と合わせて3回実施となれば、大学としては、実益が大きい。学校側でも、大学の教師から指導を受け課題意識をもってインターンシップで指導する学生の真摯な取組を見ることができるのは、担任が教師を志した頃の初心を思い出させることと推察し、益が多いと確信する。

(1) 学校ボランティアは、学校側にとってのねらいは教師指導の支援であり子どもたちにとっての実益である。一方、大学にとっては、学生の現場体験であり少しでも実践的指導力に触れることである。学校ボランティア活動が、学校現場にとっても大学生にとっても実益が大きいものを目指したい。その一方策として、4年生段階(教員免許取得見込み)学生については、4年生の後期には1週間程度のインターンシップ制度と称して



赴任直前インターンシップ
(3月実施)

上記の取組は、大学3年生から伊達市立保原小学校で学校ボランティア活動を続けてきた大学4年の男女学生が、3月に短期間試行実践（担任演習）を行った例である。二人だけではあるが、週案や指導案作成などを含めた教職直前実習に実に前向きに取り組始めている。その効果は、彼らが今後明らかにしてくれるものと期待している。この学生たちは、教員採用試験に合格し、4月から教壇に立つことが決まり3月卒業時に免許状の授与を待つ学生たちである。

先進的な事例として、千葉県でのインターシップ対象者は、原則として、小学校もしくは特別支援学校での研修を希望する大学3・4年生、大学院生、千葉県の短期大学に通う2年生として実施している。⁽⁴⁾

(2)学校ボランティアから学校インターンシップへ

学校ボランティアから「学校インターンシップ」に、普及・促進方策が今後検討されていく必要がある。と『教職研修』の中で述べているのは、福井大学教職大学院教授松木健一氏⁽⁵⁾である。そして、これからの学校教育を考えるに当たっては、アクティブ・ラーニングの実現に欠かせない「学ぶ」「物語る」が気にかかる。とも述べている。

学生にとって、ボランティアで手伝いしながら真似るに値する教師を見つける（学ぶ）ことが教師の第一歩。理想とする教師の姿を友達同士で「物語る」ことができるようになることが、今後の学生自身の学習のあり方を方向付けることにもなるだろう。とすれば、大学は研究に専念するだけでなく、学校現場でよい授業・学級経営をしている教員をリサーチし、学生に提供できる環境を整える必要がある。そのためには、現場と太いパイプをもった退職校長の情報量がものをいう。これは、教職大学院の充実にも通じる点である。

学校ボランティアの充実で学校(子ども・教師・学校環境)に馴染み、同じ学校でインターンシップまで発展できたら学生にとっての教育効果が高まることと期待する。

今後、政府の教育再生実行会議（座長・鎌田薫早稲田大総長）提言に、正式採用前に教員の適性を厳格に評価する「教師インターン制度（仮称）」導入の検討が盛り込まれる見通しだ。現在は大学卒業時に授与している教員免許を、1年程度の「インターン」期間中に適性を見極めた上で授与する仕組みについて、本格的な論議を求めるようだ。

子どもが多かった1970年代～80年代に採用されたベテラン教員が退職期を迎え、各地の学校では経験の浅い若手教員が増加。指導力の向上が課題となっている。このため提言案では、正式採用前に教員としての適性を測る必要性を指摘している。

（2014/6/20 読売新聞）⁽⁶⁾

上記新聞記事が、本格的に実現する話は具体的にはまだ聞こえてこない。経過措置として、本基準表を有効に活用して学校ボランティアや短期インターンシップの力を蓄えていくのも、現場で求められる実践的指導力に結びつく活動になると期待している。

3 実践的指導力とどうつなげていくか

本学では、今後下記の3つを柱にして実践を積み重ねていけば、現場での実践的指導力に少なからず結びついていくとの実感とさらなる見通しを持っている。

(1)実践参画：学生は週1・2度半日程度、学校に出かけ、そこで授業実践に参画する。たとえば、授業中、授業者のアシスタントとして机間指導をしたり、学習のつまずきのある子どもやじっと席に着いていられない子どもの傍らにいてそうした子どもたちの学習を手助けしたりする。なお、教育実習と違って、学校側の教員が学生の指導はしない。

(2)リフレクション：他の学生、担当指導者が一緒に吟味・検討する。これまでの教育理論・知見などに照らしながら、学生が支援した子どもの学習診断をしたり学習方法を考えたりする。(本学では、カンファレンスの名称で実施している。)

ここで検討したことは、学生が次回学校訪問した際に活かされる。田村学氏⁽⁷⁾は講演の中で、充実感・達成感・自己有用感・一体感など手応え感覚(ポジティブ感情)を感じられるこの活動こそ、実践的指導力を高めるために重要な取組である、と述べている。残念ながら、本学の現状では毎回報告に来る学生は限られ課題となっている。

(3)研究：実践参画とリフレクション(カンファレンス)を踏まえて、自らの実践を「研究」にまとめる活動。各学生は研究テーマを一つ決めて、子どもに対する学習支援記録を整理・分類し、年度末に発表する。学生たちの研究成果は冊子にまとめられ小学校にも報告される。

(本学でこの形で研究しているのは、実践参画と卒業論文の研究テーマが関係している学生だけである。今後、せっかくやっているボランティアの①実践参画をより質の高い内容にしていくために②・③の活動も充実していけば、大学で求める実践的指導力に結びつくものとする。) これは、小林敬一も、『大学教育』⁽⁸⁾の中で述べている。

本学の先行研究『学類・大学院の実践的カリキュラムの充実のために』⁽⁹⁾の中で学校ボランティア活動目標段階を下記3点

ステップ1「学校の概要を理解し、ボランティア活動の具体的な課題と展望を持つことができる。」

ステップ2「課題をもって、計画的に活動支援する。」

ステップ3「学生(大学)の特性を学校教育活動に役立て、学校文化を高める。」

学年と学校ボランティア活動内容を下記3点

2年生： 広く活動しながら、学校教育活動の理解を深める。

3年生： 教育実習とあわせて、自己課題を焦点化し深める。

4年生： 採用を目前にし、実践力を高める。

を統合した試案として、『福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準』にまとめた。その内容は、主観に頼る項目・評価基準内容が多かったが、学生が教師として即戦力を目指し自分の活動を振り返りながら活用すれば、少なからず実践的指導力につながり有用性はあるものと見通しを持った。だが、自分で主体的に授業をしない・学級経営をしない指導アシスタント段階で、「授業づくり」「学級づくり」「学校・地域づくり」にボランティアでどんな関わりをもてるか、大学の講義との関連や内発的動機づけになる項目開発についても、今後さらに検討したい。

4 学校教育支援実習(どうカリキュラム化したか)

40時間の実習と事前・事後指導とカンファレンス5時間の合計45時間で1単位履修

とした。1日勤務の場合、約5日強で1単位とした。大学2年生～大学院生まで系統性をもたせるように文章化した。語尾を変えることに留まり、系統性ある関係の差違を示すことが難しかった。評価が主観に偏りやすい点は認識した上での試案である。

本学では、平成27年度は2年生対象に「学校教育支援実習Ⅰ・Ⅱ」と2単位カリキュラム化した。平成28年度は、同様に2・3年生へと対象を拡充し、平成29年度には、2～4年生対象にさらに広められる。

実際に、2年～4年生まで学校教育支援実習をカリキュラム化した場合、上述①実践参画の段階で大学指導担当が足を運ぶ頻度が高くなると予想される。②リフレクションの内容充実のためにも、学校教育支援実習時の学校訪問は、担当者の努力義務になる。さらに、大学は学生に学校教育支援実習でお手伝い以外の何を実践的指導力として学ばせるか吟味検討して基準表で明確にしたい。そのために、指導担当者間での共通理解とリフレクション（カンファレンス）の力量アップを目指した研修は必要不可欠であると考えている。

おわりに

大学や学校ボランティア指導担当者が、学生対象とした「実践的指導力」を具体的にどのようなようにとらえ、学生にどのような具体的な力を身に付けさせようとしているのか、明確にしたい。それは、現職教員でも当てはまるような内容を網羅した基準表から、より「発問」「板書」「指導案書き方」など、大学生・院生に身につけさせたい具体的なイメージとして浮かぶ内容でありたい。

一方、大学の授業内容としては、今日的学校課題にも対応できる「実践的指導力」をつけるための内容等との関連付けが必要不可欠と考える。そして、学校ボランティア指導担当者は、大学と連携を取りながら、どこの部分の内容をどのように受け持つのか役割分担を明確にして学生のリフレクション（カンファレンス）に当たる必要がある。

現状の学校ボランティア活動・学校教育支援実習は、学生が自己決定した意思によって支えられている。その能動性に加え、既述の①実践参画、②リフレクション、③研究の過程を踏んで、学びを深める活動に積極参加する学生を一人でも多くさせたい。学校ボランティア・学校教育支援実習実践直後に、学校指導担当者と基準表を基に定例的にリフレクション（カンファレンス）を積み重ね、次回ボランティアに行く際に課題意識をもって行く学生の姿は、子どもたちの資質・能力・態度の成長によりよい影響を与えるだろう。より能動的で課題の発見と解決に向けて、鈴木・稲垣たちの『授業設計マニュアル』⁽¹⁰⁾による提案等を活用して、より主体的に学ぶ学生の取組を期待したい。

【参考・引用文献】

- (1)福島大学人間発達文化学類：『教職履修カルテ』福島大学.pp.22-25.2015
- (2)小林正幸・大熊雅士：『現職教師が活用する教師学』ぎょうせい.pp.88-89.2007
- (3)評価規準・評価基準：<http://soudan1.biglobe.ne.jp/qa337364.html> 2016.3.7アクセス
- (4)千葉県インターンシップ制度 <http://www.kyoushi.jp/entries/460> 2015.3.7アクセス
- (5)松木健一：「『学校インターンシップ』はどんな学習活動か」、教育開発研究所・教職研修誌 10pp.32-32.2015
- (6)教育再生実行会議『举止インターン制度』読売新聞 2014.6. 20

- (7)富田英司・田島充士：『大学教育』ナカニシヤ出版.p.72.2014.3
- (8)田村学：『アクティブラーニングが高める確かな学力』県教育センター講演資料.2015.11.26
- (9)福島大学人間発達文化学類：『学類・大学院の実践的カリキュラムの充実のために』福島大学.p.5.2014.3
- (10) 稲垣忠・鈴木克明：『教師のためのインストラクショナルデザイン・授業設計マニュアル Ver.2』北大路書房 pp.180-188.2015

学校ボランティアの実践力評価基準の効果に関する調査研究 まとめ

福島大学 松下行則

本年度の取り組みの成果と課題をまとめておこう。

1 齋藤の評価をもとに

本報告者の一人である齋藤幸男は、学校ボランティア活動の支援を3年半継続しており、カンファレンス活動等を通して、学生の成長のための指標づくりに取り組んできた。その一つが今回取り上げた「実践力評価基準」（以下「評価基準」）である。平成26年度に試案（資料 ）を作り、子年度それに基づいて、その効果を検証してきた。

第一に「評価基準」の妥当性については、「評価者によって評価が異なっているが、これは評価者によって項目の内容理解やハードル（基準）をどこに置くかという点で違いが生じていることが要因」と捉え、今後、「多くの学生のレポートを検討」によって、妥当性を検証したいとしている。

第二に、「評価基準」項目設定の有効性については、「評価者からは、評価項目が簡潔な言葉で4項目に整理されているので、実践力評価基準が分かりやすかった」、「カンファレンスをしていて、何について話題にしているかが明確でないと深まらない。教室の出来事を広く4項目で把握し、そこから話題を狭めてしていくことで、探究課題が明確にすることができた」と評価している。今後の課題として齋藤は「各項目を教室の中で起きている具体的な出来事と結び付けて、学生が理解できる言葉にしていくことが求められている」と指摘しており、「評価基準」の「教室化」が必要とされる。

学生による「評価基準」の有効性がある程度示されているが、比較対照する他の「評価基準」がないため、有効性の検証も今後必要となる。また、「教室化」には多くの時間と人材が必要であり、今後の大きな課題である。

第三に、今年度は、学校ボランティア活動を相対化し、その効果を検証するために、学校ボランティア活動を数ヶ月以上継続して教員になった「新任教員1名への1年間の観察、カンファレンス活動」を年間通じて実施した。学校ボランティアと学校現場の違いとは何かを把握し、大学や学校ボランティアで求められる指標の検討を開始した。仮説としては、その大きな違いは、学校ボランティアが児童生徒個人ベースの活動であるのに比して、教職が児童生徒集団ベースの活動であり、「教育者としての使命感」、とりわけ「責任感」が養成段階では形成されにくいという問題、また教員養成段階から新任教員段階には「児童生徒の理解力」がまだ児童生徒一般として把握できず、教師としての「観」が育てられ難いという問題がある。しかし、1年間の観察とカンファレンスによって、新任教員の成長を把握することができた。

そこでは、「初任者にとっての実践的指導力の成果と『実践力評価基準』から見た成果とが一致するわけではないことが分かった」と指摘している。

「評価基準」は、学校ボランティア活動の一つの基準として効果はあるものの、教室の事実と関連させながら精緻化し、さらなる効果を生み出すためには、実践場面における「教

室のルーティン」だけでなく「教育理念の把握」が必要となってくる。

齋藤は、「初任者に求められる実践的指導力とは、週のスケジュール管理や授業づくり、学級づくりができる、同僚や保護者との関係性がつくれるといった、基礎的な教師としてのルーティンができることにあるようだ。また、これは初任者自身が求める実践的指導力でもある。／しかも、初任者といえども学力競争だけでなく、いじめや不登校など生徒指導についても一定の成果が求められる。しかし、学校教育の現象の部分だけでなく、授業づくりや学級づくり、コミュニケーションの背景にある教育理念が基盤になることも分かった。」と述べている。

さらに、本年度は、伊達市教育委員会の協力を得て、保原小学校において2名の1週間「教職インターンシップ」（平成28年3月7日～11日）を試行したが、その活動を通して、学生には、「学級経営や授業実施の手順」が未形成という問題が浮上してきた。この点については、今後さらに実践的研究が必要となった。

2 荒木の評価をもとに

また、本年度は、本報告の著者の一人である荒木藤夫が8月より学校ボランティア支援室のメンバーとして加わった。荒木は、平成26年度に作成された「実践力評価基準（試案）」には直接に関わっていなかったため、第三者の目で「試案」を評価してくれている。

荒木は、第一に、「試案」が学年ごとの指標を示しているが、学校ボランティアは、まさにボランティアで短期集中や継続的な長期参加によって様々でありうる。その点から見れば、学年ごとの指標は指標とはなりにくい。第二に、基準とは一般的に活動を評価できる指標であるべきで、「試案」は、「評価規準としての色合いが強」い。第三に、学校が期待する教師への支援活動と大学や学生が期待する実践的指導力の醸成との矛盾を指摘し、それらが「錯綜した位置づけ」となっていると批判している。これらの指摘は正しい。

今後の課題として、大学の講義と関連させた「評価基準」の作成やカンファレンスを実施する担当者間での「評価基準」の共通理解とカンファレンスの力量の向上をめざす研修の必要性等を指摘している。

「評価基準」の効果を検証する作業は、同時に、「評価基準」を再設定するための作業であり、大学の学生教育の姿勢や指導性を再評価する作業でもあった。なお課題は多い。今後一つ一つ可能なところから調査研究を重ねていきたい。

(別表1)学校ボランティア活動報告書の 評価表(全員)

学年		4年			3年															
氏名		NA	UR	SM	MR①	MR②	SH①	SH②	AY①	AY②	SK	KH	ER	SM	TY	NY	TH	OA	ND	
実施校		金谷川小	福三小	日和田中	保原小		保原小		清明小		杉妻小	福四中	福四中	福四中	信陵中	桃陵中	日和田中	福三中	信陵中	
子ども理解	2年	興味関心						○											○○	○○○
	3年	問題意識	○	○○	○	○○○	○○	○○	○	○	○○	○○	○○○	○○	○○	○○	○○○		○	
	4年	課題意識	○○	○	○○		○		○	○○		○		○	○	○		○○○		
授業づくり	2年	興味関心							○		○		○			○			○○○	○○○
	3年	問題意識	○○	○	○	○○○	○○	○○○	○○	○○○	○○	○	○○○	○	○○○	○○	○	○		
	4年	課題意識		○○	○			○		○					○		○			
学級づくり	2年	興味関心						○					○			○			○	○○
	3年	問題意識	○○	○○	○○	○	○	○○		○○	○	○○	○○	○	○○	○	○	○		
	4年	課題意識					○		○		○				○					
学校・地域づくり	2年	興味関心	○	○	○	○	○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○○	○	○○	○○	
	3年	問題意識	○	○	○												○			
	4年	課題意識																		
コメント		広範性 発達障 害・ほめ 方しかり 方 子どもの 成長、慎 重派	授業実 践・発問 板書 チャレン ジ精神、 授業実 践、行動 派	保健室 登校等 心を開 く、生徒 を見守 る。	教師の 役目	教師の 役割 教師の 魅力、そ の子の 可能性を 伸ばす。	『学び合 い』	『学び合 い』・学 級自治 学びあ う集 団づく り。	特別支 援・H君 事件	特別支 援・招く 活動	不登校 傾向 Kの不登 校、教師 の役割 責任を体 験的に 学ぶ。	特別支 援 障がい の壁を 作って いたの は私。子 ども一 人ひと りに合 わせた 指導。	あいさつ 声かけ、 あいさ つ。要求 から承認 の転換。	特別支 援 特学、文 献、柔軟 な対応。	学級崩 壊 学級崩 壊の原 因と崩 壊 (信頼を 築く教師 になる)	放課後 勉強会 5クラス の観察 から一人 ひとり違 うこと、ク ラスも違 うことが わかる。 追究が 薄い。	保健室 登校等 2人の生 徒と全力 で向き合 う。先生 方一人一 人が違 う。子 どもの成 長にか かわりた い。	理工(理 科) 現場体 験で、問 いの入り 口	理工(数 学) 現場を知 ることが できた。 観察と気 づき。	

※ 評価の方法:達成しているところに○をつける。

(別表2)M小学校調査研究

No.	月日	曜	子ども理解	授業づくり	学級づくり	学校・地域づくり	その他
1	6/15	月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3人の男子の私語がうるさい。 → よさを見つける。 ○ 大部分の女子は、授業中は静かで無言。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねらい、活動、まとめが漠然と展開している。 例 少数のかけ算をマスターしよう 新聞記事の構成を知ろう 係り活動の反省をしよう ○ 指示、発問が漠然として明確でないために、子どもたちは何をしようか分からない。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学級目標がない。 (理由 子どもたちがいらないう。)) ○ 係活動の反省は、子どもたちに任せて指導がない。 (要因 担任に学級社会という認識がない。) → 男子・女子のリーダーを育てたい 		<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちが、新しい担任に慣れていない。クラス替えで、子ども同士も学校生活習慣が異なり慣れていない。
2	7/13	月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3人の男子の自由な発言に、授業が途切れる。 ○ 女子は静かに参加しているが、あきらめている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ねらい、ゴール、手順を明確に指示する。 ○ 授業展開力・基本的指導過程をつける。 ○ 教師主導で、教師が学んでいる、子どもの「学び」や子ども相互の「学び合い」がない。 ○ 子どもに達成感がない。 ○ 発表を聞き合う姿勢が乏しい。 ○ 子どもの話しかけに応じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ T男事件発生と対応 T男が、休み時間に3人の男子に靴を隠されて、泣いて席につく。 ○ 担任は「T男は謝ってほしいというけれど。」と言って、謝るのを待っている。別の男子が、3人にあやまったほうがいいよと声をかけると、しばらくして3人が謝り、授業に入る。(指導がない。) 		<ul style="list-style-type: none"> ○ H学年主任との面談 ① U教諭について <ul style="list-style-type: none"> ・ 学級経営が思うようにできない。 ・ 授業づくりがうまくできない。 → 授業参観の授業は、H主任が学校訪問時に行った授業案を提供した。 ② 現職教育の課題について <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの考えを把握して練り上げる授業づくりに取り組んでいる。 ・ 特別支援の研修が役立った。
3	8/31	月	<ul style="list-style-type: none"> ○ 授業中の私語に笑顔で切り返して、軽く受け流して授業に引き戻そうとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 基本的指導過程ができて、授業が安定してきた。 ・ 導入: めあての確認 ・ 展開: 一人調べ 全体での話し合い ・ 終末: まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ Uスタイル、Uワールドが子どもたちに伝わってきて、子どもたちに安心感が感じられる。 		<ul style="list-style-type: none"> ○ 子どもたちが、U教諭に慣れてきた。 ○ 授業づくり自己診断表の記入を依頼する。

4	9/14	月	<p>○ D男の就学時検査があり、検査のため別室に移動するとき、H男に「どこにいくんだ」と尋ねられて、U教諭は「検査」とだけ応える。15分程度してもどると、「どこへ行っていったんだ」と尋ねられて、D男は「絵描いてきた」と応える。</p> <p>○ 理解の遅いM子は、たびたびU教諭から質問を受けたり「わかる？」と声をかけられるが、「わかんない！」と静かに困ったような声で訴える。</p> <p>○ 算数の時間、T男が突然「9はなんでちがうの？」と質問されておろおろしていると、Y男とA男がそばに来て教えようとするが、わからないので目に涙をうかべる。U教諭は他の子の意見を取り上げてそのまま進む。T男は、しばらくして席に着く。</p>	<p>○ 1校時の算数はテスト直しで、1問目から順番に確認していき、2校時も35分間までかかる。残り5分間で国語の時間として教材の首読をするが、途中で終了する。U教諭が一人で勉強していて、子どもたちが置き去りにされている。</p>	<p>○ 朝の会が、落ち着いた進行する。</p> <p>○ 間違えた子に他の子から「ばかだねーの」と声がかかり、その子は「おればかだも」と応えていた。</p> <p>○ 「縦系・横系チェックリスト」(学級づくり自己診断表)を提案するが、「授業づくり自己診断表」のような反応はなかった。</p>	<p>○ 「授業づくり自己診断表」の検討 <大変難しい項目> ① 関係ない話をしている児童がいる。 → Y平はよくなった。2人はよいところを探そう。</p> <p>② 学習内容が理解できず、考えるのをやめてしまう児童がいる。 → M子の「わかんない！」には、孤立させない工夫が必要だ。</p> <p>③ 発表に対しての周囲の反応がなく、1対1の受け答えになってしまう。 → 聞き合う関係をつくる。</p> <p>④ 学力・意欲が低い児童の点数が上がらない。学力テストに向けての学習の取り入れ方 → できる場所を確認する。スモールステップ、道具を使う。「学び合い」を取り入れる。スキルを繰り返す。 <その他の記述内容> ・ 挙手しない児童も指名すれば発言できる。 ・ 国、算は、板書計画を單元ごとに立てるようにしている。 ・ 字を雑に書く子が多い。 ・ 男子どうし、女子どうしでしか交流しようとしない。</p>
5	10/16	金	<p>○ F男が朝の会の司会をする。1分スピーチでもたもたして進まないとき、U教諭が口ぞえするがうやむやのまま終了し、書写の準備に移る。</p> <p>○ 午後児童との教育相談があり、短縮時程になる。</p>	<p>○ 黒板に水筆で範書し、その後子どもたちが手本をもとに書きはじめる。個別に「先生、先生」の呼ぶ声に対応している。 → 書写の基本的指導過程がわからない。</p> <p>○ 初任研の先生に、「希」の書き順のまちがいを指摘されて、一斉指導する。 → 指導のポイントの押さえ方が甘い。</p>	<p>○ 「縦系・横系チェックリスト」(学級づくり自己診断表)を提案するが、授業づくり自己診断表のような反応はなかった。</p> <p>○ 2校時は校内研究授業で自習になったが、子どもたちはしっかりと課題に取り組んでいた。高学年で一番だった。</p>	<p>○ Mまつりや県学力テストなどにかく次から次へとやることがあり、バタバタしている。</p> <p>○ 学力差が大きい。</p> <p>○ 初任研の授業が5つ残っている。 → 子どもたちが落ち着いてきた。子どもが先生と個別につながっているのが、子ども同士をつないでどうか。 (校長から)「授業づくり自己診断表」は、U教諭を変えているようだ。</p>

6	11/17	月	<p>○ 他の子どもたちは落ち着いて学習に取り組むようになった。H男を学習に引き戻すためにどうするか。</p>	<p>○ 国語のめあて 手塚治虫の生き方について「○○の人 手塚治虫」のような形で表そう。 → 補助発問をするが、意味をつかめなかったようだ。 例示するなど、子どものレベルに落とし込みたい。 ○ 算数(初任者研・校内授業研) ・ 計画どおりに進んだ。 ・ めあてとまとめが重なっていた。 ・ ステップを低くして、わからない子に手がかりをあたえたい。</p>			<p>○ 算数の授業研について、事前に学年主任の学級で行い、反省を元を実施した。「私もこんがらかった」といいながら、達成感のような自信が感じられた ○ 話し合いを取り入れて授業ができるようになった。 ○ U教諭は、経験を積み重ねながら、教える意味や子どもの「学び」の意味、学級づくりの意味をU教諭なりに考え実行しているようだ。U教諭のわかるところわからないところを確認しながら積み重ねていくことが大切だ。</p>
7	12/7	月	<p>○ 子どもたちが落ち着いてきている。笑顔が見られるようになってきた。 ○ 個別面談について、何のためにするのかわからない。</p>	<p>○ 算数のめあて 三角形の面積の求め方を考えよう。 ・ 既習事項の確認 ・ 自力解決 ・ 友だちと交流、「学びあい」 ・ 全体で確認 ・ まとめ ○ 国語のめあて テーマを決めて、自分なりの枕草子を書こう。 ・ 例示 ・ 書く ・ 読み合い</p>			<p>○ 子どもたちが落ち着いてきた。 ○ 授業が進歩してきて、楽しかった。 ○ 細かな手立て(方眼紙を用いる。わからない子には具体物の操作活動を取り入れるなど。)は、これからつけていく。</p>
8	1/18	月	<p>○ Y男とうまくつきあっている。</p>	<p>○ 算数のめあて 250円のペン30%引き！いくらでしょう。 ○ 学級活動(初任研授業) 正しい断り方ができるようになるう。</p>	<p>○ 学級活動の授業を計画して、学級づくりを意識するようになった。 ○ 席替えを毎月行っているが、子どもたちのイベントになっていて大変だ。</p>		<p>○ 教師としてのルーティンがついてきた。 ・ 教師のこぼし「今は関係ないでしょ。はい、こっち」 ・ 授業パターン(基本的な指導の進め方)ができるようになった。 ○ 週指導計画(週案)の意味、価値がわかった。</p>
9	2/15	月	<p>○</p>	<p>○ グループ学習発見 音楽主任からグループ学習の指導を受けて、初めてグループ学習に挑戦し、とても使えると実感した。</p>			<p>○ 週案でスケジュール管理し、教科、生活指導が見通せるようになった。</p>

10	3/4	金					○ 校長とU教諭にアンケート調査依頼
----	-----	---	--	--	--	--	--------------------

信頼される教師をめざして 学校ボランティアに参加しよう

今、学校はさまざまな課題をかかえながら、先生方は子どもたちに真摯にむきあって指導をしています。そして、授業中集中がとぎれて出歩く子がいたときや既習内容でつまずいて先に進めないでいる子がいたときに、もう一人補助してくれる人がいたらと思うときがあります。そんなときの一人があなたです。学校ボランティアの出番です。

教育の出来事は、子どもたちのいる学校で起きています。「自信をもって教壇に立ちたい」「学校の役に立ちたい」「教師の仕事ってどんな仕事？」などの自分の課題を、学校現場が解決してくれます。

2年生は学校理解とプレ教育実習体験に、3年生は学校教育の基礎づくりと課題探究に、4年生・院生は学校探求と教師力アップに学校ボランティアを体験してみませんか。

あなたの一歩が、あなたの実践的指導力につながります。信頼される教師をめざしましょう。

○ **家から通える身近な学校で活動できます。**

大学は、福島市、郡山市、伊達市、国見町と協定を締結しています。

○ **活動は、1日でも、2日でも、1週間でも、毎週1日でも、あなたの都合のつく日にできます。**

対象

人間発達文化学類2～4年生 院生

いつ

○都合のつく時間（1時間でも、1日、1週間でも） ○定期的に（都合のよい曜日ごと）

○行事の日（運動会、遠足、学校公開等） ○夏休み、冬休み期間

活動内容

○学習や生活、部活動支援 ○特別支援学級支援 ○行事等の支援 ○夏休み中の学習支援

交通

電車、バス、自転車、徒歩等（自動車、バイクの使用は認めません。）

場所

福島市

郡山市

希望する市内の小中学校

- 対象者 3～4年生、院生
- 前後期 各1人1,000円
- 前後期ごとに、学校ボランティア支援室に利用申請書を提出

伊達市

国見町

伊達小 桃陵中
保原小
上保原小
梁川小

くにみ幼
国見小
県北中

- 交通費（予算内で支給）
- 実施した日ごとに、学校に請求書類を提出

助成

申込方法

教務課実習担当窓口に

学校ボランティア支援員（齋藤・二瓶）が、ていねいにサポートします。

問合せ先

学校ボランティア支援室 理工 107室

(e-mail :齋藤 ysaito@edu.c.fukushima-u.ac.jp、二瓶 hnihei@edu.c.fukushima-u.ac.jp)

実践・省察し信頼される教師になろう

学校の出来事が丸ごと学べます

4月はじめから4年生4名が、保原小学校で活動を始めました。鈴木洋仁さんは絶対的な経験値の差をうめたいという思いから、蜂谷佳菜さんは子どもと直接かかわりたいという願いから始め、それぞれの「学び」を実感しています。



昼休みが終わり、子どもたちと話しながら教室にもどります。

絶対的な経験値

4年 鈴木 洋仁

私は学校ボランティアを4年生の4月から始めました。始めたきっかけとしては友達の学校ボランティアの話聞き、興味を持ったからです。その友達との会話を通して自分にはない絶対的な経験値の差を感じました。教育実習とはまた違った子どもの姿、教師の仕事、職員室の雰囲気等々を肌で感じることは、他の活動では得られることができないからです。また、教員採用試験や卒業論文でも大いに活かせることができると思いました。正直、3年生の後期からやるか悩んでいましたが、学校の現場を見ることは相当の価値があると思い、この4月に学校ボランティアを始めことにしました。実際に行ってみて、もっと早くから決断すればと後悔しました。なぜなら、学校へ行く度に新たな発見、数多くの学びがあるからです。どんなものがあるかは…教えられません。皆さん自身で感じてほしいと思います。是非勇気を出して一歩踏み込んでください。きっと新しい世界の広がりを感じることができると思います。

教師の指導法を学ぶ

4年 蜂谷 佳菜

私は今年の3月から保原小学校でボランティアをさせていただいています。学校ボランティアに参加するようになったのは、教育実習を終えてから子どもと直接かかわる機会がなかったことに不安を覚えたからです。それまでボランティア経験は少なかったのですが、先生方や一緒に活動をしている友人のおかげで充実したボランティアができています。

私はボランティアをするようになってまだ2か月しかたっていませんが、教師の指導という点で大きな学びがありました。それは、子どもに「〇〇しなさい」というのではなく、「〇〇さんのやり方がいいね」というようにある子どもに注目し、そこから子どもたち自身がどんな方法がよいのか気づき身に付けていくという指導方法です。このような指導が「子ども主体」ということであり、子どもの思考力の育成につながるのだと分かりました。

教員を目指すにあたって実際の学校現場を知ることが大切で、学校ボランティアはそれを学べる貴重な機会だと思います。これからも自分自身が



子どもたちと向き合って給食を食べます。ちょっとハズカシイ？

鈴木晴香さんは2年目になり、子どもたちの成長に注目していく中で自分の成長に気付き、次の高みをめざします。宗像梨奈さんも2年目になり、教師と子どもが黒板を背に対面して学ぶ授業から、子ども同士がつながる指導法に注目しはじめました。大学の講義（理論）と学校の出来事（実践）とをつなげて、自分の「学び」になっています。



グループごとに給食を食べます。スキナバングミナアニ？



昼休みの遊びは、子どもたちを知る絶好のチャンスです。



子どもたちの成長と私の成長

4年 鈴木 晴香

今年度の活動がいよいよ始まりました。子どもたちが最上級生としてどのように成長していくのかとても楽しみです。ホームクラスでは『学び合い』の質の向上に向けて頑張っています。担任の先生は子どもたちに、なぜ学ぶのか、これから生きていくために必要な力とは何かを、ひとりひとりが確かな学力を定着させる意義とともに語りかけます。「一人も見捨てない」学び合いに基づき、他者と関わりながら自分も成長するという力を身に付けた子どもたちが次のステップを踏み出し始めたのだと思いました。

先日教員採用試験の勉強をしていた時に、自分が活動の中で大きな発見をしていたことに気が付かされました。子どもの成長を見取りながら先生方の姿から学ぶ中で、私の中に理想の教師像や育てたい子ども像が少しずつでき始めたということです。どうして小学校の教員になりたいのかを、深く自分と向き合い始めていたことに驚きました。子どもにとっても私にとっても最後の1年となる今年度は、これまでの学びを大切にしながらもっと自分の言葉で教職に対する考えを深め、次のステップを踏み出していきたいです。

カンファレンス会（保原小研究室）

放課後4人で、今日の出来事と「学び」の情報交換をし、「学び」の共有をしています。質疑応答をとおして出来事が多面的に考察されます。

【問合せ先】 学校ボランティア支援室は、疑問、困りごと、要望、相談に応じます。

(理工107 e-mail: 齋藤幸男 ysaito@educ.fukushima-u.ac.jp

二瓶洋允 hnihei@educ.fukushima-u.ac.jp)

【相談時間】 月～金 (9:00～16:30)

【体験訪問】 水曜日は、保原小学校で全校『学び合い』を体験できます。

学校ボランティア活動が 学校教育支援実習として 単位認定されます！

平成26年度入学生からは、一定時間以上学校ボランティア活動を行うと、「学校教育支援実習Ⅰ・Ⅱ」として単位が認定されます。

対象

- 平成26年度入学生から



単位数と必須時間数

- 学校教育支援実習Ⅰ（1単位）：45時間
- 学校教育支援実習Ⅱ（2単位）：90時間



活動内容と必須時間数

- 学校ボランティア活動
Ⅰ：40時間以上、Ⅱ：80時間以上
- 事前指導 1.5時間
カンファレンス 2時間以上
事後指導 1.5時間

単位認定の要件

- 必須時間数
- 学校教育支援実習記録表
事前・事後指導記録表
学校教育支援実習報告書

単位申請

- 活動時間やその他の時間、報告書等要件が満たされたときに、随時教務課に申請します。
履修登録は不要です。

申込み窓口

- 教務課実習担当

提出・相談窓口

- 学校ボランティア支援室



- 活動を始める前に、必ず学校ボランティア支援室担当の事前指導を受けてください。
- 「学校教育支援実習Ⅰ」と「学校教育支援実習Ⅱ」の両方について単位を修得することができます。
- 活動は、福島市、郡山市、伊達市の希望する学校園、またはその他の学校園で行うことができます。詳しくは、学校ボランティア支援室に相談してください。
- 活動終了後、1月20日までに提出書類を学校ボランティア支援室に提出してください。

【相談窓口】学校ボランティア支援室（理工107 印刷室となり）

齋藤 幸男 e-mail ysaito@educ.fukushima-u.ac.jp

二瓶 洋允 e-mail hnihei@educ.fukushima-u.ac.jp

【相談時間】月～金(9:00～16:30) 不在の場合もあるので、事前にメール等で連絡を取ってください。

資料3

「実践力評価基準」

評価表

福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準(試案)

(基本的な考え方)

- 1 子ども理解が、全ての教育活動の基盤となる。
- 2 縦軸に学年段階による実践力の深まりを、横軸に「学び」のひろがりを表にした。すべてがこのように段階をふむのではなく、モデル例として示した。

学年	段階	項目	項目内容	評価基準			評価
				発見	省察	創造	
2年	参観 興味 関心	子ども理解	子どもに興味関心を持つ	子どもと話ができる	子どもの中に入り、行動を記録できる	子どもと共に活動できる	1 2 3 4 5
		授業づくり	授業に関心を持つ	子どもの発言や考えに関心をもつ	子どもの発言や活動を記録できる	子どもの「学び」を整理できる	1 2 3 4 5
		学級づくり	学級の雰囲気分かる	学級の雰囲気に気付く	子ども同士の関係を記録できる	子ども同士の関係を整理できる	1 2 3 4 5
		学校・地域づくり	教師の仕事に関心を持つ 学級と保護者の関係に関心を持つ	教師の仕事に気付く 学級と保護者の関係に気付く	仕事を分担して行うことができる 授業参観等に参加できる	教師の仕事を整理できる 授業参観等に参加し感想を持つことができる	1 2 3 4 5
3年	参加 問題意識	子ども理解	子どもの特性や発達を理解できる	子どもの言動に関心をもつ	子どもの言動を記録できる	子どもの言動を整理できる	1 2 3 4 5
		授業づくり	子どもの「学び」と授業の展開を理解できる	子どものつまずきに気付く	子どものつまずきを記録できる	子どもの「学び」と授業の展開を整理できる	1 2 3 4 5
		学級づくり	学級での役割や集団の在り方を理解できる	子どもたちの活動の様子に気付く	子どもたちの活動の様子を記録できる	子どもたちの活動を整理できる	1 2 3 4 5
		学校・地域づくり	教師間の協力関係に関心を持つ 学校と地域の関係に関心を持つ	教師間の協力関係に気付く 学校と地域の関係に気付く	学校の仕事を分担して行うことができる 学校行事等に参加できる	教師間の協力関係を整理できる 学校行事等に参加して感想を持つことができる	1 2 3 4 5
4年	参画 課題意識	子ども理解	子どもを共感的に理解できる	子どもの言動の背景に気付く	子どもの言動の背景や要因を把握できる	子どもの言動に寄り添い支援できる	1 2 3 4 5
		授業づくり	子どもの「学び」と授業の展開を探究できる	子ども同士の「学び」の関係に気付く	子ども同士の「学び」の関係を記録できる	子ども同士の「学び」と授業の展開を整理できる	1 2 3 4 5
		学級づくり	子どもたちの集団と教師の関係性を整理できる	子どもたちの集団に気付く	子どもたちの集団の関係を記録できる	子どもたちの集団と教師の関係を整理できる	1 2 3 4 5
		学校・地域づくり	学校を組織として理解できる 学校と地域連携について整理できる	教師の役割に気付く 地域教材や地域人材の活用に気付く	教師の役割を記録できる 地域探検や地域交流授業に参加できる	教師の役割と責任を整理できる 学校と地域連携について整理できる	1 2 3 4 5
院生	参画 実践 課題追究	子ども理解	子どもの成長の様相を理解できる	子どもの資質・能力の可能性に気付く	子ども一人ひとりの様相を整理できる	どの子にも寄り添うことができる	1 2 3 4 5
		授業づくり	「学び」のある授業を計画実践できる	「学び」のある授業を計画構想できる	「学び」のある授業を実践し、検討できる	どの子にも「学び」のある授業を計画構想できる	1 2 3 4 5
		学級づくり	親和性のある機能する学級集団づくりを計画できる	学級集団としてのまとまりや機能に気付く	子どもたちの活動の様子や関係性を継続的に記録できる	親和性のある機能する学級集団づくりを計画できる	1 2 3 4 5
		学校・地域づくり	同僚性の高い学校づくりを構想できる 地域の未来を拓く学校を計画できる	教師同士の関係性に気付く 学校が地域に役立つことに気付く	教師同士の関係性を整理できる 地域に役立つ学校を整理できる	同僚性の高い学校づくりを構想できる 地域の未来を拓く学校を計画できる	1 2 3 4 5

資料4 学校ボランティア活動報告書

(2015.3/24)F小

学校ボランティアを経験して

4年 UR

私は、小学生の頃の恩師の影響で小学校教員になることを目指していました。そのため、目標をもつきっかけとなった母校で何かしてみたいという思いをもっていました。教育実習は附属小中学校での実施であることを知り、どのように行動を起こせばよいか悩んでいた時に掲示を見つけ、学校ボランティアに興味をもつようになりました。

初めて説明会に参加したのは大学2年生の時でしたが、参加者は片手で足りるほどで同級生の姿もなく、とても心細かったのを覚えています。しかし、「自分がやりたいことは挑戦するべきだ!」という気持ちで、思い切ってボランティアに登録しました。当時は平日の空きコマがほとんどなかったため、夏休みの2週間のみ活動することに決めました。

実際に学校に行ってから、様々な活動に参加しました。ボランティアでありながらもただの手伝いとしてではなく、私自身の学びもとても大切にさせていただいたため、多くのことを学ぶことが出来ました。ボランティア初日は当時の3年生の社会科見学の引率補助を行い、自分が「先生」という立場に近づいているということを実感しました。また、実際の教育現場を体感したことでその後の教育実習や教員採用試験にも経験を生かすことが出来たと思います。

3年次、4年次は週に1回程度学校に通いました。活動を継続したことで、子どもたちや先生方との距離も縮まったように感じます。また、活動の幅もどんどん広がっていきました。特に、4年後期は実践的な経験を多くさせていただきました。授業をさせていただき、発問のしかたや板書の仕方、話し合い活動の取り入れ方など多くのことを改めて考えることができ、4月からの教員生活に生かせることばかりであると感じています。毎回の活動も、「自分に出来ること、チャンスをいただけることには何でも挑戦する!」という気持ちで取り組んでいたため、多くの学びの場をいただけたのではないかと思います。授業も、その他の教育活動も、実際に経験してみないと分からないことがたくさんあると実感しました。本当に貴重な経験をさせていただけたことは、大学生活のなかでもとても大きなものです。

また、たくさんの学年の子どもたちと関わることが出来たのも、大きな学びになりました。発達段階に合わせた接し方があるということも、実際に体験してみて本当に理解できるものであると感じました。たくさん子どもたちに、三小の先生になってほしいと言われたのも本当にうれしく、また誇りに思えることだと思いました。

学校ボランティアとして母校で活動することが出来たのは、とても幸せなことだったと思います。たくさんの先生方、子どもたちと出会い、夢をより現実的なものにすることが出来ました。何事も挑戦してみることで見えてくるものがあります。これからも学校ボランティアとして多くの学生にたくさん挑戦して学んでほしいと思うとともに、自分自身もこのチャレンジ精神を忘れず、学び続けていきたいと思っています。

学校教育支援実習報告書

提出日 平成 年 月 日

所属	人間発達文化 人間発達	学類 専攻	学籍番号	氏名
活動を行った学校名	双葉南・北小学校、梁川小学校、金谷川小学校			
活動期間	平成27年5月23日～平成27年11月11日			
活動日数・時間	17日 95時間			
1. 活動内容				
双葉南北小学校(平成27年5月23日)……1日6時間				
「平成27年度ふたば幼稚園・双葉南北小学校運動会」補助				
会場準備・片付け、司会進行、ゴールテープ持ち、				
「ジャンケン列車」の参加、園児・児童の誘導				
梁川小学校(平成27年8月19日)……1日7時間				
オープンライブラリー補助				
図書整理、学級図書の選抜・運搬、図書館の掲示物の				
貼り換え、装飾品の作製、図書のラベル・シールの貼り付け				
金谷川小学校(平成27年7月1日～11月11日)……15日82時間				
各教科の学習補助、…14日78時間				
(授業中)理解がおくれている児童への学習補助、担任・				
ALTの補助、教室を巡回して児童たちの				
学習状況を把握・補助				
(授業外)宿題の提出状況のチェック、プリントやテストの				
採点、配布資料の印刷、宿題を提出しな				
かった児童への個別指導、休み時間・給食の				
時間における児童たちとの交流				
「平成27年度学習発表会」……1日4時間				
会場準備・片付け、各学年のステージ発表準備の補助				
児童(発表会の係)の誘導、児童といっしょに発表鑑賞				
裏へつづく				

○ 1月20日まで提出すること(20日が土・日曜の場合は、翌週の月曜まで)

○ ペン書き、ワープロ可。1200字程度。資料があれば併せて提出すること

2. 活動で学んだこと

私は、この学校教育支援実習の経験を通して多くのことに気がつくことができました。まず第一に、普段から「授業がつまらない」「勉強がきらい」と言っているような子であっても、「子どもは本来、学びたがっている」ということです。授業中で何か分からないことがあると担任の先生や私に不安そうな視線で訴えるなど「わかるようになりたい」と思っているサインを子どもたちは示します。また、私がお世話になった学級においてはいわゆる「落ちつきのない(多動)」男子児童Kくんがいて、突然の訳がわからない奇行を繰り返していました。しかし、Kくんの行動を観察して、なんでそんな行動をしたのか考えていくうちに、Kくんの頭の中ではある刺激から突然の奇行まで一連の流れでつながっていて、ちゃんと理由ある行為であったことがわかってきました。以来、Kくんとは徐々に打ち解けられるようになりました。この経験から、子どもに寄り添うには子どものことを理解しようと努める態度を持ち続けて接していくことが大切であると考えられるようになりました。また、教師の指導面においては、お世話になった先生はよく「みんなにわかってもらえるように説明を考えてね」とおっしゃっていました。この言葉により、子どもたちは自分の考えを根拠づけて他の人にも納得してもらえるように言葉を探して説明しようと理解を深めていく様子が見られました。発表する児童を指名する際も、教室を巡回して、誰がどんな考え方をもっているか完璧に見極めた上で発表者を決定しておられて、教室の(出来るだけ)全員の子どもが理解し次の学習に進められるように授業を展開されていました。このような指導力は教員を目指す上では必ず求められる能力の一つであると考えました。また、個人的に驚いたことは、休み時間の子どもたちの会話の中で、お気に入りの動画(アニメ、ゲーム実況等)についての話題が多かったことです。私が小学生だったときには考えられない、現代の子生たちを取り巻く環境の変遷に改めて目を向ける必要があると考えました。

M 小学校調査研究計画

－ 学校ボランティア活動の検証と改善 －

福島大学人間発達文化学類研究員 齋藤 幸男
（学校ボランティア担当）

1 趣 旨

学校ボランティア活動をした学生が、新採用教員として学校現場でどのような力を発揮しているか、どのような力が求められているかを調査研究し、今後の学校ボランティア活動に資する。

「福島の未来を創造する能動的な教師としての基礎的実践力評価基準（試案）」（以下 評価基準試案）を検証し改善を図るとともに、学生の教員養成から教師へのスムーズな移行をねらいとしている。

2 対 象

(1) 会津美里町立 M 小学校教諭 UR（以下 A）

平成 27 年 3 月本学卒業、同年 4 月 1 日 日本県小学校教諭採用、会津美里町 M 小学校（以下 M 小）に配置

大学 2 年次から 4 年次まで学校ボランティア活動を積極的に行ってきた。

(2) M 小教職員

3 対象校

会津美里町立 M 小学校

4 内 容

(1) 評価基準試案の検証と改善

- 項目
- 評価基準

(2) 学校現場が新卒・新採用教員に求める実践的指導力とは何か

- 内容
- 資質

(3) 教員研修の現状と課題

- 現職教員が求める研修内容と現状

5 方 法

(1) A：参与観察（月 1 日程度 中旬月曜日）と記録、アンケート調査 2 回

(2) M 小学校教職員：聞き取り調査（随時）、アンケート調査 2 回

6 学校訪問計画

月	活 動 予 定	内 容 等
4	学校訪問 4/27（月）	校長、A 教諭の承諾等
5	学校訪問① 5/18（月） 半日	
6	学校訪問② 6/15（月） 1 日	アンケート調査① 聞き取り調査（随時）
7	学校訪問③ 7/13（月） 半日	

8	学校訪問④ 8/28 (月) 半日	検証① 記録の整理、試案の検討
9	学校訪問⑤ 9/14 (月) 半日	
10	学校訪問⑥ 10/23 (金) 1日	
11	学校訪問⑦ 11/16 (月) 半日	アンケート調査②
12	学校訪問⑧ 12/14 (月) 1日	検証② 記録の整理 改善案の作成
1	学校訪問⑨ 1/18 (月) 半日	
2	学校訪問⑩ 2/15 (月) 半日	検証、改善案策定、次年度計画
3	学校訪問⑪ 3/14 (月) 1日	報告書作成

7 参与観察の内容・方法

- 子ども理解、授業づくり、学級づくり、同僚・保護者・地域との関係づくり、初任者研修等
- 観察者(齋藤)が、Aや児童の障害にならないようにAや児童の行動を観察し記録にとる。
記述、カメラ、録音等

8 学校訪問時の日程

時刻	半日	1日	備考
8:00~10:15	観察等	観察等	給食
13:15~16:45		観察等	聞き取り等

9 その他

- (1) 学校訪問時の給食注文

資料6-2

M小学校調査研究記録⑨

M小調査研究資料⑨(H28.2/15)

日時	平成28年2月15日(月)
日程	8:10～8:30 校長と話し合い
	・詩の授業の説明
	・A先生についての最近の情報
8:30～8:35	朝自習・高学年合唱練習
8:35～9:20	1校時 算数
9:30～10:15	2校時 齋藤「詩を楽しもう」
10:35～11:20	理科(分科担任) 齋藤と面談
11:30～12:15	体育(体育館でダンス、なわとび)
12:15～13:00	給食(5の2の教室9)
13:15	下校

1 校長との面談

(1) アクティブラーニングの授業モデルがほしい

教師と子どもという対面から子ども同士への学びに接続しない。

(2) A教諭について

音楽の研究授業で初任研が終了した。3つのグループ学習がよかった。

2 1校時算数の授業(分数×整数の方法を説明しよう)

問題文 $3/7 \times 2 = 6/7$

課題 分数×整数＝分子/分母×整数なのか、説明する。

ヒント 数直線や図を使っていい。

友だちと相談OK、教科書OK

説明 $1/7$ の3こ分があり、 $3/7 \times 2$ は $1/7$ が (3×2) こ分になる。

課題1 練習問題をとく。(大部分の児童は、問題を解けていた。なぜそうなるのかの説明ができていない。なぜか?)

課題2 「学び合い」が機能していない。→ 課題の意味が伝わっていない。

3 2校時 齋藤の詩の授業

(1) 「ぼく」の正体を、本文からあてよう。(クイズ形式の課題)

(2) 解くキーワードをヒントで示す。「6つの力」と「かまきり」の詩)

(3) 友だちの交流(学び合い)の必然性が高い。

→ 友だちに聞いて確かめてみたい。説明したい。

(4) 思いつかない様子を表す表現を隠し、クイズ形式にして興味をもたせる。

(5) 音読をして、表現する。(楽しい!)

4 面談

◎ グループ活動発見

(1) 音楽の授業

音楽主任からグループ学習を教えてもらい、初めてグループ学習に挑戦した。とても使えると実感した。

グループ発表をしよう、と取り組ませた。

事後指導で、指導された事項

- 思いや表現まで高まっていない。
- スキルを丹精させるには、グループ構成が大切だ。スキルの高い児童を必ず入れておくこと。
 - ただ単にグループをつくれればいいんでないんだ！生活班ではだめなんだ！
 - リコーダー練習もグループでやるようになった。

(2) 学力テスト対策

- 4月に全国学力調査があり、対策がない。
 - スキルと説明する授業を交えながら取り組ませたい。
 - 子どもたちには、学力テストにのぞむ意味が分からない。(なんでやらないといけないの。このままでもいいじゃん)

(4) 教師のルーティン

- 週案でスケジュール管理し、教科、生活指導を見通せるようになった。

- 初任者のゴールに着いたか、自信がついてきた。
- 次のステップをもてるか、が課題だ。(品質の向上、中身の充実)
 - 同僚が高度な技を実践して見せていることか。(モデルさがし)
 - 教えてくれることか。(サークルの誘い)

資料 7

UR教諭の自己診断表

授業づくり自己診断表

自己診断基準(4:大変難しい、3:難しい、2:少し難しい、1:易しい)

No.	項目	自己診断	具体的な課題	具体的な方策
1	授業に参加しない児童への指導が難しい ・学習意欲のない児童 ・集中できない児童 ・立ち歩いてしまう児童 ・他の児童に迷惑をかけてしまう児童等	4	・関係のない話をしている児童がいる	
2	進度・学力差への対応が難しい ・進度の速い児童と遅い児童の差 ・課題がはやく終わった児童への対応 ・学習が遅れてしまう児童への対応	4	・学習内容が理解出来ず、考えるのをやめてしまう児童がいる	
3	教材研究が十分にできない ・時間がとれない ・どのようにすればよいか分からない			
4	発問の仕方が難しい ・児童の考えを引き出す発問 ・児童の思考を深めたり広げたりする発問 ・端的に分かりやすい発問 ・ねらいに合った発問			
5	授業のルールを決めたり守らせたりすることができない ・話し方や聞き方のルール ・時間の守らせ方	4	・発表に対しての同位の反応が悪く1対1の受け答えにのみしてしまう	↓
6	いつも同じ児童ばかりが発言する ・挙手する児童が決まってしまっている ・授業中なかなか手が挙げられない児童がいる		(挙手しない児童も指名すれば発言できる...)	
7	板書の仕方が難しい ・ポイントをまとめて書くのが難しい ・書くのに時間がかかってしまう ・板書計画が十分にできていない		(国算は板書計画を単元ごとに立てるようにしている...)	
8	児童の意見のいかし方、まとめ方が難しい ・教師の意図する方向とのズレがある ・多様な意見をまとめきれない ・想定外の意見に戸惑う ・つぶやきをうまく拾えない ・児童の意見が繋がらない			
9	児童が興味・関心を持てる授業にならない ・児童を引き付けられない ・導入の仕方が難しい ・学習に興味・関心を持たせることができない			
10	ノートの書かせ方が難しい ・ノートに何をどのように書かせるか ・ノートにどのくらいの分量を書かせるか		・字を雑に書く児童が多い	
11	学力を高めるのが難しい ・単元テストの平均点が上がらない ・学力テストの平均点が上がらない	4	・学力意欲が低い(児童の点数が上がるまで) ・学力テストに向けての学習の取り入れ方	
12	その他(自由記述)		・男子どうし、女子どうしでしか交流をしようとしていない	

<参考>神奈川県立総合教育センター『小学校初任教師のための授業づくりハンドブック』(平成21年3月)を参考に齋藤が作成した。